晴天を誉めるなら夕暮れを待て

ミラージュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
晴天を誉めるなら夕暮れを待て

【Ｎコード】
Ｎ２２８６Ｆ

【作者名】
ミラージュ

【あらすじ】
善とは何か？悪とは何か？何が正しくて何が悪いのか？一人の人間として、この世に生まれてきた者として、一体どの様な生き様を歩むべきなのか？そんな不安や迷いや固定概念をも吹っ飛ばす真の男のバイブル、読めるもんなら読んでみろや！！

上（前書き）

この作品は現在連載している『Ｂｅ　ａｍｂｉｔｉｏｕｓ！！』からのスピンオフ作品となっております。

時期設定は本編の第４９話から第５５話から約五年前のお話、主人公たちの父親である渡瀬虎太郎、真中啓介、松本新作の三人が幼少期に育った孤児院『森川の里』へ久し振りに訪れた時に遭遇したある事件が題材になっております。

彼ら三人を一人前の男に育て上げた孤児院院長、鈴婆こと森川鈴子が波乱万丈の人生の末に大往生を遂げる。
その訃報を聞いた三人の中心的人物、渡瀬虎太郎はふと鈴婆との最後の思い出になったその五年前の出来事を振り返る……。

内容は酷く脱力した大バカコメディーになっておりますので、本編を知らない方でも楽しめるかと思います。

若干長い作品ですが宜しくお願い致します。

上

沖縄から飛行機で関東に戻る際、俺は空港の中でその訃報を聞いた。
それはあまりに突然で、予想だにしていなかった話だった。

「……虎ちゃん？　母さんね、この前亡くなったの……」

ガキの頃に母親にさっさと死なれ、クソッたれな父親に捨てられた俺。そんなゴミくずに手を差し伸べて、一人前になれるまで育て上げてくれた孤児院の女院長。その恩人が先週、静かに息を引き取った。老衰による肺炎。九十五歳の大往生だった。
電話の相手の俺達にとって姉の様な存在のその女性の娘からその話を聞いた時、それ相当の事じゃないと全く動じない鉄の意志を持つさすがの俺もショックでしばらくの間言葉が出てこなかった。
しかし、なぜかそれほど悲しくはなかった。まぁ、その婆さんが死にそうな素振りや雰囲気なんぞはガキの頃から見てきた俺にはとても想像しにくい事だったし、子供の頃筋金入りの悪ガキだった俺は随分とその婆さんにシバかれまくったという痛い記憶があってあまり懐いていなかったというのもあるんだが。
それ以上に、婆さんそのものが俺も呆れるほど無鉄砲で豪快な性格で、何の悔いも無いであろう最高な人生を送ってきたはずなので、半ばやっと死んでくれたかという妙な安心感と過去の婆さんとのやり取りを思い出してニヤニヤとしてしまう変な俺がいた。

「……あの婆さんは絶対不死身だと思ってたけどなぁ？　やっぱり人間ってもんはいずれは土に還るもんなんだな……」

予定より一便遅れたエアチケットをいつもの理不尽ないちゃもんでキャンセル待ちを無理矢理ふんだくった俺は、飛び立つ飛行機の小さい窓から真っ赤に染まった夕暮れの空を眺めて婆さんとの最後の対面となった過去の出来事を思い出していた。

そう、あれは今から五年前の伊豆の伊東の石廊崎。俺達が出逢い、育ち、様々な宿命で結ばれ、世界へと旅立っていった思い出の『我が家』での一日……。

「アンタ達ー！　大の大人がそんな大勢集まって子供を痛めつけて、恥ずかしいと思わないのかーい！　何が警察だ、何が機動隊だ、大きな権力には尻込みしちまうくせに、弱い者イジメも大概にしろってんだい！！」

その日が偶然にも一日だけ、俺達三人『兄弟』の予定がピタリと合って時間が作れる事になった。俺もプロライダーの現役を退いてからは仕事だの子育てだの後輩ライダーの育成などでなかなか時間が取れず、久し振りの自由に使える休日だった。

「……一日だけ、日本に帰ろうと思う、家族との時間も考えたが、たまには久し振りに三人でゆっくりするのも悪くないと思ってな……」

俺と同じ孤児院で育ち、兄弟同然の啓介から同然かかってきた国際電話。国内の伝説のバンドのギタリストから日本はおろか世界中のミュージックシーンで音楽プロデューサーとして活躍し、年収ウン億万円を稼ぎ出すレーベルの社長に君臨するアイツが自分の時間を作れるなんぞ四年に一度あるか無いかの話だ。
もちろん、この機会を無駄にするのももったいない。俺は啓介の会社の財力に世話になって世界一周突撃カジノ三昧やパツキン姉ちゃんベロベロはべらかし酒池肉林の千夜一夜でもかましたろうなんて思っていたんだが、その話を聞いたもう一人の兄弟、新作が興醒めする様なプログラムを用意してきやがった。

「せっかくやん、三人で久し振りに帰省するっちゅうのもどうや？
母ちゃん、お前らの顔が見たい見たいって毎度毎度うるさいねん、たまには挨拶くらい行ったれや？」

四六時中女の乳と尻ばかり見てる四十にして嫁との間にガキ作ったビンビンのエロ河童が何を言い出すのかと一瞬耳を疑ったが、確かにコイツはあの孤児院出身者の中でも一番のマザコン野郎。挙げ句はその娘の姉ちゃんにまでベタベタのシスコン野郎。
俺は正直気が進まなかったが、啓介もその話を聞いて乗り気になったし、新作は成人になる前に心臓に重大な疾患を抱え超人的な生命力で世界中の様々な場所を取材するジャーナリストとしてここまで生きていた男。いつコイツが死ぬかも知れねぇなんで野暮な事は言いたかねぇが、せめて人とは違う重いハンデを背負った新作に最高の人生を送らせてやりたい俺は喉に支えるこの予定を無理矢理唾で流し込んでやった。
それに、実は俺にもその場所には婆さん以上に挨拶をしなければい

けない存在が静かに眠っている。それは俺の唯一無比の親友だった風間貴之とも深い親交があった忘れ難き大切な『男と女』。最近俺自身が不摂生な生活でちと二人と顔を合わせ辛くて避けていたんだが、そろそろそうも言ってられん。いい加減花の一本くらい添えてやらんと罰が当たっちまう。

「しょうがねぇな、いつまで経っても乳離れ出来ねぇ赤ん坊達の為に、お兄さんが気を利かせてお家まで連れて行ってやるよ、有り難く思えよ？」

車やバイクで行くのも何かつまんねぇ。それぞれ三人ともメディア等に露出し顔が知れた立場だったが、そんな事はお構いなしだ、週刊誌にどう書かれようと知ったこっちゃねぇ。列車の中で昼から缶ビールかっくらいながら売り子の姉ちゃんにセクハラ三昧で久し振りに故郷へと三人で向かった訳だ。

ところが、この様。

「いいかい、ここにはアタシを含めてあたしの娘と孫と、アンタ達の上司の息子が乱暴しようとしたか弱き女の子の四人が人質として匿われてるんだよ！？　もし無謀な真似なんかしたら人質の安全は保証出来ないよ！？　人質解放の条件はただ一つ、婦女暴行未遂をした世間様を知らない馬鹿男とその仲間達、それとその馬鹿親の県警の重役とやらのお偉いさんをここに連れてきな！？　アタシ達の町の大切な若者に罪を擦り付けようとしたその大罪、この森川鈴子婆さんがきっちり落とし前つけてやんよ！！」

久し振りの帰省もクソもなく、行きの列車内で酒ですっかり出来上がっちまった俺がさらに孤児院跡の森川邸で一升瓶片手に昔話に花を咲かしていたら、突然学校の制服が乱れた少女を匿いながら田舎もん丸出しの若僧が何かから追われる様に家の玄関に駆け込んできた。どうやら追っ手の正体は警察の様だ。

「あのー、俺ー、偶然この子が男達に山ん中に引きずり込まれるのを配達中に見てー、訳わかんねーうちにこの子助けて自転車の後ろ乗っけて逃げてきたんだー！　そしたら、何でかわからんけど俺がこの子襲った事になってー、お巡りさん達が俺の事追い回してくるんだー！　歩美さん、波子、俺どしたらいいんだー！？」

このガキの名前は武雄っていうこの近くの港の漁師の跡取り息子で、親の手伝いで近所の家に捕れた魚を配り行っていた。そこで、学校帰りの少女が複数の若者に連れ去られそうになったのを目的したらしい。

「……このお兄さん、私の事助けてくれたんです！　なのに、お巡りさん達は私の話を全然聞いてくれなくて、お兄さんが犯人だって勝手に決めつけて……」

「……でも、どうして襲われた本人がちゃんと証言してるのに警察は信じてくれないの？　武雄ちゃん、犯人達の姿は確認出来たの？」

「……あのー、最近ここら辺をうろつき回ってる不良達、あいつらに間違いねー！」

「あいつらかー！？　あたしらの学校の卒業生で親が警察の重役の腐った男が頭の不良達だー！　あいつら、他にも色々と女に悪さしてる噂いっぱい聞いてるぞー！？」

あんまりに唐突な話なので俺はサッパリ事情が飲み込めず代わりに一升瓶の日本酒をラッパ飲みでグビグビやらかし、ガキと少女の対応は全て顔見知りらしい婆さんの娘の歩美姉とその息子の波子に任せっきりだった。
隣では啓介と新作も何か不安そうに玄関先を覗いていたが、いくらここが俺達の故郷だっていっても住んでいたのはかれこれもう二十年以上も昔の事。今の俺達はこの町からしたらただの部外者にしかすぎない。せっかく休みに来たのに面倒な事に巻き込まれるのもウザいので、俺達は酒を酌み交わしながら見て見ぬ振りをしていた。

ところが、だ。この話を俺達に囲まれながら居間で上機嫌だった婆さんの耳に入っちまったんだなぁ、これが。弱きを助け強きを還付無きまでに粉々に粉砕しないと気が済まない正義感か征服感か良くわからないもんの塊の婆さんがこれを聞いて黙っている訳がない。九十の老体で真ん中に置いてあったちゃぶ台をひっくり返して完全に怒り浸透。

「聞いたかい、息子達！　町の若者が正しい事をしたのに卑劣な権力を使ってそれをもみ消すどころか、その罪を押し付けられそうになってるんだよ！？　こんな馬鹿な話が許されてたまるかい、アタシは戦うよ、子供達の未来の為にこの身をもって全力でお上とタイマン決めてやろうじゃないかい！！」

「おいおいおいおい、いきなり何言い出してんだよババア！？　そんな真似したら頭の血管プッツーンっていわせて速攻あの世逝きになっちまうぞ！？」

「……行動を起こすには時期早々、まずは冷静に事態を確認する事が先決……」

「そうやで母ちゃん？　何もまだ、ここに警察が押し寄せて来た訳とちゃうやろ？　もう母ちゃんも九十なったんやから、少しは大人しくなって可愛い婆さんに……」

いきり立つ婆さんを三人で宥めようとしたその時、家の外から数台のライトが家中を照らして眩しい閃光が窓から差し込んできた。何事かと窓から外を覗き込むと、家の前の道には数台のパトカーと機動隊の収容車、それと巨大なライトを天井に備え付けた工作車が停まっていた。

「おいおい、何だよこの急展開は！？　すげぇ大袈裟だし話飛び過ぎだろ！？　展開のワビのサビもねぇじゃねぇか！？」

「……総文字数が限られている為部分省略、作者の都合による……」

「それにしても適当やなぁ！？　子供一人捕まえんのにこんな演出いるかぁ！？　どこのハリウッド映画やねん！？」

家中の周りは警察により完全に包囲されていた。まるで刑事ドラマのワンシーン。実際俺も昔、悪さしまくってた頃はこれくらいの数

の機動隊とやりあった経験は何度かあるが、今回はさすがに予想してない展開で少し呆れかえった。こりゃ、相手の悪ガキの親ってのはかなりのお偉いさんなんだと予想出来た。

「……この家に立て籠もっている犯人に告ぐ！　我々警察はここを完全に包囲した！　逃げ場は無い！　中の住民に危害を加える事無く速やかに出てきなさい！」

「いいねぇいいねぇ！　この張り詰めた空気、この緊張感！　相手がデカければデカいほど燃えちまうアタシは久し振りに完全に火がついちまったよ！？　こうなったら徹底的にやろうじゃないか、歩美、波子！　二人を家の奥まで案内して匿ってやんな！　虎太郎、啓介、新作！　アンタ達が世界で暴れまくってきたその力、このアタシに見せて貰うよ！？」

俺達がそのテンションについていけずに唖然としていると、婆さんは一人勝手にやる気満々で新聞紙を丸めメガホン代わりに約百人近くの警察官や機動隊相手に伊豆随一と言われた『鈴子節』の良い啖呵を切った……。それが最初のあの台詞だ。

「人質四人って何だオイ！？　俺達は数に入ってねぇのか！？　いつから俺達が立て籠もりの主犯になってんだぁ！？」

「……しかも人質が警察を脅すなんて、根本的に何か間違っている……」

「母ちゃん勘弁して～なぁ！？　虎太郎はもう前科何犯もあるから

ええとしても、俺にはこの前生まれたばかりの次女がおるんやで！？　啓介かて仕事に支障出たら俺達の貴重なスポンサー無くなってしまうやん！？」

「俺はどうでもいいってどういう事だこのスケベ野郎！？　テメェも一度冷たい独房の中で臭い便器でクソしてみるかゴラァ！？　それともムキムキムチムチのアニキと同じ牢に入れてケツの穴ほじくり回してやろうか、あぁん！？」

「……お前達に提供した資金は全て投資のつもりだ、もちろん、後々それで出た利益は還元して貰う……」

「お前なぁ啓介、そない関西の商売人みたいにケチな事言うとるとな、いつか寝首かっ切られるでホンマに！？　それにな、俺はムチムチでもおっぱいボヨンボヨンでお尻がプルンプルンのピチピチセクスィーお姉ちゃんしか股間の新作レーダーは反応せえへんねん！　ガチムチアニキなんぞ便器に流してジャ～っや！」

「馬鹿な言い合いしてんじゃないよこのダメ息子達がぁ！　いいかい、籠城とは長期戦だよ！　諦めずに最後まで己の意志を貫いた者が勝つんだからね！？　それがわかったら、さっさとヘソに力入れて腹をくくりやがりな！？」

そこから徹夜で一晩明けるまで婆さんノンストップで吠えまくり。まるで戦時中の空襲みたいにどっからか竹槍まで持ってきて、完全にこのババア一人でこの雰囲気を楽しんでいやがった。やっと落ち着いてウトウトし始めたのは早朝の頃。何とか婆さんは俺が布団まで運んで眠りについてくれたが、相変わらず家の周りには警察がわんさかいやがる。

「……おい坊主、お前よぉ、面倒だから今からでも警察に出頭して事情説明してこいや？」

「……えっー？　そんな事したら俺、絶対に逮捕されるー！？」

「だからよぉ、その女の子と一緒に自分が見た真実をはっきり証言すりゃ全て解決するだろうが？　警察だってバカの集まりじゃねぇ、ちゃんと裁かれる者は裁かれて、お前は無事に帰ってこれるから心配すんな、なっ！？」

俺がこの時ガキに出頭を促したのは、俺自身があまりこの事件に対してやる気が湧かないってのもあったが、このバカみたいな状況を早いところ終わらせたいという気持ちが強かったからだ。目が覚めたら婆さんは俺がやらかした事に激怒するだろうが、九十歳にもなる老婆をこんな緊迫した状況下に置き続けて何か体に異常をきたして貰っちゃ尚更困る。

そもそもこんな立て籠もりなんてせずにちゃんと話をつけりゃとっくに終わってた事件だったかもしれんし、いつまでも俺達はここに居続ける訳にもいかんからなぁ。俺にも啓介にも仕事があるし、新作の体の具合も心配だ。

「ぶっちゃけ誤認逮捕されても婦女暴行なら軽くて五年もくらいで出てこれるからよ、大して人生損する事もねぇさ、まぁ何かの縁だと思って少年院入んのも悪くねぇぞ？　うん、問題ねぇ問題ねぇ、はいはい解決解決！　ほら、さっさと外行くぞガキ！」

「……そんなー、俺、俺ー！」

「……駄目だ、駄目だ駄目だ駄目だー！　そんなの、絶対駄目だー！！」

すると、さっきまで部屋の片隅で大人しく座っていた孫娘の波子が焦りながら困った顔をして俺に食いついてきた。まだ高校生くらいながら俺の服を掴んで揺さぶる力は柔道黒帯クラスの衝撃。さすがは歩美姉と男漁師の間に生まれた娘っ子だ。

「お願いだよー、武雄を連れていかないでくれよー！　あたしは武雄と一緒に立派な漁師になるって約束したんだー！　武雄が逮捕されたりしたら、もしかしたら一生漁師になれなくなっちまうかもしんねー！？」

「ハァ？　女のクセに夢が漁師かよ？　最近珍しいガキだな、大丈夫だろ？　前科があっても漁師くらいなれるんじゃねぇのかよ、アン？」

「……それだけじゃ、それだけじゃねーんだー！　あの、あたし、あたしは、その……」

俺が喉の渇きを潤す為に一升瓶の残りの酒を飲みながら波子を睨みつけると、波子は急にもじもじとしながら顔を赤らめてガキの方を横目でチラチラチラチラ。俺がフゥと一升瓶を飲み干して一息ついた瞬間、意を決した様に膝を両手で叩いて俺を睨み返してきた。

「……あ、あたし、将来武雄と所帯持って可愛い赤ん坊産むってもう心に決めてるんだー！　学校出たら、すぐに武雄の嫁になる為に花嫁修行するって決めてるんだー！！」

「……ハァ？」

「……えっ？　えっ！？　えっー！？　お、俺、俺、そんな話初めて聞いたー！？　波子、一度もそんな事俺に話してくれなかっただろー！？」

「い、今更馬鹿言うなよー！？　とっくにわかってたくせにあたしの気持ちー！？　武雄が強くて立派な男の漁師になるって約束してくれたのは、あたしの旦那様になる為に言ってくれたんじゃないのかー！？」

「……そ、そうだー！　その通りだー！！　俺、波子に気に入られたくて頑張って漁師目指してたんだー！　昔から波子を俺の嫁にしたくて頑張ってんだー！！」

「ば、馬鹿ー！　あんまり嫁、嫁、言うなー！　恥ずかしくて顔から火が出てしまうだろー！？　あたしな、嫁も頑張ってな、漁師も頑張ってな、お父ちゃんとお母さんのいいとこ取りした最高の女になるんだー！」

「うわー、すっげーなー！　嬉しいなー、嘘みてー！？　俺もいつか波子の父ちゃんみたいな最強の漁師魂持った男になるー！　俺、波子と祝言挙げんのにやっぱこんな所で逮捕される訳にはいかねーよー！？」

「そうだよー！　あたしの旦那を連れていかないでくれー！　坊主頭のオッサン、アンタはどんな逆境に追い込まれても、その度に立ち上がってきた世界最強の男だって婆ちゃんが言ってたぞー！？　本当にそうなら、どうか武雄を助けてあげてくれー！　お願いだよー！？」

「……参ったなこりゃ、おい……」

目の前で時代遅れな昭和の甘酸っぱい恋愛話を聞かされた挙げ句に今度は人助けの要請。さすがの俺もこの時は本気で困った。決して俺は正義のヒーローなんて名乗れる様なもんじゃねぇからなぁ。頼み事なら妖怪ポストにでも手紙入れてくれ。

「おい、虎太郎ぉ！　娘がこんなに必死になってテメェに懇願してんだぞゴラァ！　テメェも男気と誠意ってもんを少しは見せたらどうなんだこのスカポンタンがぁ！！」

「歩美姉まで触発されて裏モード炸裂させてどうすんだ、アン！？　テメェら親子はちょっと落ち着けやゴラァ！！」

「……あらやだ、私ったら波子の必死な姿を見てついつい、ウフフ……」

「……全く、チッ……」

次々降りかかってくる問題と酒の回り方がいまいち悪くて頭が痛くなって突っ伏してたその時、それまで何時間も言葉を発しなかった

啓介がいきなり立ち上がって黒いコートのポケットから小さな携帯らしきモバイル機器を取り出した。そのアンテナを伸ばすと機体から何やら赤いランプが点灯し、啓介は静かにそれを耳元に寄せて会話を始めた。

「……一部始終は聞こえていただろうな？　速やかに、ここからの脱出ルート確保と関係者の確保を開始する、なお確保は必ず本人同意の元で行う事、以上……」

「ん？　おい啓介、お前今一体誰と電話……」

……バタバタ、バタン！！

「……うおっ！？」

次の瞬間、居間の隅の畳が急に真上に跳ね上がり、その下に掘られた人が一人通れそうな穴から黒いボディスーツを着た謎の男が二人現れた。突然の訳のわからない状況に俺達は呆気に取られて言葉が出てこなかった。

「マスターK、すでに脱出ルートは確保済みです、脱出先の護送車の準備も万全です」

「……了解した、ご苦労……」

「……おい啓介、何だこりゃ……」

「……仕事で海外に在住する際に、日本にいる妻のあづみと娘の小夜を警護する為に俺が自ら設立したシークレットサービスだ、隊員は全て軍隊上がりの筋金入りの忠誠を誓った人間ばかりだから心配しなくていい……」

もちろん、こんな黒服ボディガードサービスの存在は今の今まで俺も新作も全然知らなかった。というより多分守られているであろうあづみ姉チャマも小夜も全く知らねぇだろうなぁ。

「……お前は何ちゅうもんを日本に潜伏させとんねん？　もしかして、俺達も知らん間にこのクロネコサービスのお世話になってたりしとるんか？」

「……時間帯お届け指定は別途追加料金になります……」

「ケチな話やな～？」

その黒忍者軍団は用件を済ますとその穴の中にあっという間に姿を消した。まぁ、何て手際よいお仕事だこと。啓介も暴行されかかった少女を誘導してその避難路の穴の中へと入っていった。

「……彼女には少し手助けをして貰うので連れて行く、あとは悪いがもうしばらくここで辛抱していてくれ……」

「何や何や？　俺達は逃げられへんのかい？　置いてきぼりかいな？」

「……そういう訳ではない、今ここから全員が逃げ出してしまったら、この少年は警察がふきかけてきた冤罪を認めてしまう事になる、俺はそれを阻止する為に、これからシークレットサービスの力を使ってこの事件の加害者の捜索を開始する、それまでは何とか凌いでくれ、それでも駄目な時はここから逃げられるから使ってくれ……」

「……啓介、お前急にどうした？　そんな切り札みたいな軍団まで出してきて、冷静なお前が何をそんな鈴婆みたいにやる気満々になっちまってんだ？」

「……歩美姉さんの娘さんの願いに突き動かされたんだ、もし、自分の娘が大切だと想っている男が同じような立場に追い込まれていたとしたら、俺はそれを黙って見過ごす事は出来ないだろう、ただそれだけだ……」

「……啓介……」

「……虎太郎、新作、鈴子婆と歩美姉を頼むぞ、すぐに戻る……」

啓介は静かにそれだけ言い残すと、捲れていた畳を戻して穴の中へと消えていった。しかし、この穴はいつどうやって何を使って空けたもんなんなんだか、今考えてもサッパリわからん。あの時酒が入りすぎた俺の見た錯覚かもしれない。

「うははぁー、あの黒コートの足長オッサン、メチャクチャカッコ

いいなー！　さすがは婆ちゃんの自慢の子供だー！　あんなカッコいいオッサンにも娘がいるんだー、あたし羨ましいなー！？」

「おぉっと波子ちゃ～ん？　カッコいいオッサンならここにもおるでぇ？　啓介がブラックコーヒーなら俺はさしずめ甘くてとろけるリッチカフェラテってとこかいな？　俺も可愛い娘達が連れてきた運命のダーリンに、もし一人じゃ背負いきれない大きな問題が降りかかってきたら、この命燃え尽きても助けてやらん訳にはいかへんもんなぁ？」

「……おいおいおいおい、コラコラコラコラ、新作、まさかおめぇまで……？」

今度は新作が手持ちのバックから次々とノートパソコンやら様々なモバイルツールを取り出して無線でネットダイブをし始めた。コイツの得意分野であるメディアでの情報検索、こちらから例の県警のお偉いさんやその息子の情報や足跡を探っていく魂胆って訳だ。

「お姉ちゃ～ん、ちょっと家の電源貰うで～？　松本スペシャルモバイルサーバ、起動！」

「あらあら、新ちゃんこれって何？」

「……奥さん、気になっちゃう感じ？　これ気になっちゃうの、ねぇ？　すっごいのこれ、すっごぉいのぉ～」

「……やめて、夫はもう数年前に私を置いて新たな海の世界へ……」

「ウヘヘ、メチャメチャ不謹慎やけど未亡人歩美タン萌え萌えや～！　相変わらず姉ちゃんは俺のツボ、イヤらしい雰囲気満点やなぁ？　グヘヘ」

「何やってんだおめぇら？　すっかり四十越えたオッサンとオバサンが早朝から子供達の前でよぉ？」

「新ちゃんがこの道具を使うと、世界中の情報があっという間に全てわかっちゃうのね？」

「そう、全てだよ、世界中はもちろん、奥さんの心も体も全て丸裸さ、ありとあらゆる、あ～んなところやこ～んなところまで全て丸裸……」

「……イヤん、恥ずかしいわ、私って新ちゃんに全てを見られてしまう運命なのね……」

「うっひょ～！　熟女未亡人プレイもなかなか意外とたまらんなぁ～！　もう歩美と新作の黄昏流星群って感じやわぁ～！　あぁ～、一度でええから姉ちゃんとイケない関係になってみたかったわぁ～！！」

「だからさっきから何やってんだおめぇら？　おめぇらバカだろ？　バカだよな？　歩美姉もいちいちノッてんじゃねぇよ、鈴婆が寝たら何でもやりたい放題かオイ？」

「うははぁー、あの眼鏡エロオッサンもお母さんをメロメロにしちまうんだから、やっぱりカッコ……」

「良くねぇよ！？　何だおめぇら森川家は母娘孫三代揃ってバカま

みれか！？　俺はやる気ねぇからな、てめぇらだけで勝手にやってろ！？　酒が切れたからおれは寝るっ！」

「なぁなぁ、波子ちゃん知っとるか？　あのオッサンな、実の娘からメチャクチャ毛嫌いされとんねん、うるさいしやかましいってな？」

「余計な戯言グダグダくっちゃべってんじゃねぇぞこのクソ眼鏡！！　てめぇのチ〇ポ切り取ってそのやかましい口の中にぶち込んでやろうかゴラァ！！」

「本当にやかましいんだよオメェ達はよ！！　せっかく母さんが寝てくれたのに叩き起こすつもりかワレェ！！」

「だからいちいち歩美姉も裏モードになってんじゃねぇよクソやかましい！！」

正直、あの時何で警察が家の中に突入してこなかったのか今でも不思議だ。こっちはまるっきり隙だらけだったんだが、どうやら最初の婆さんの凄まじい啖呵と中での俺達の怒鳴り声にビビって全隊員が尻込みしちまってたってオチの様だ。
全く、日本の警察はまるで腑抜けばかりだな。昔のオッサン達の方がよっぽど骨のあるヤツが多かったのになぁ、こんな事なら本当に啓介みたいに自分で軍隊持った方がこの世の中安全だな。もちろん、俺様にはそんなもん必要ないがなぁ？

あーもう、新作の無駄話が長くて規定の文字数じゃ話が書ききれなくなっちまった様だな。回想内の俺も寝ちまったし、飛行機の中の今の俺も少し仮眠取るとするか。この続きはまた今度。じゃ、寝る

。

中

「いつまで寝てんだい、このすっとこどっこいがぁ！！」

「うぇあぅえぅえぇっ！？」

「……お客様？　どうなされましたお客様！？」

「……えっ？　あっ？　おっ？　ここは誰？　私はどこ？　マイクテストワンツーワンツー、ホワットタイムイズイット？　ネエチャン、ダレー？」

「……あ、あの、私はこの機内のキャビンアテンダンドで、時刻は十七時五分過ぎ、乗機は現在関西上空を飛行中ですが……？」

「……何だよ、夢か……」

……参ったなこりゃ。まさかうたた寝の夢の中でまであの婆さんの怒鳴り声に叩き起こされるなんてなぁ。もしかしたら俺に取り憑いたのかあのババア？　冗談じゃねぇぞ、家に帰ったら速攻で塩撒いて悪霊払いしねぇとな。くわばらくわばら。

「もし、御到着までお休みになられるのでしたら掛け毛布を御用意致しますが、いかがなされますか？」

「おっ、いいねぇ！　じゃあ、到着まで姉ちゃん添い寝してくれよ？　上でも下でも横でもおじさんが良い夢見させてやるぜぇ？」

「……あ、あの、お客様……」

「あぁ、あと酒だ酒！　ここで一番良い酒とあと三、四人スケベな姉ちゃんがいると最高だなぁ？　空飛ぶキャバクラってのもなかなかお洒落だろ、なぁ？　ギャハハハハ」

「……」

「……冗談だよ、冗談」

あぁ～、っと。俺も二十年前ぐらいのバリバリ現役ロードレース世界王者だった頃は、各国移動の手段もチャーター機一台買い占めて機内に大量の素っ裸のパツキン姉ちゃんはべらかしてドンペリを何本も空けてやったもんだかなぁ？　今やすっかりただのセクハラオヤジに成り下がっちまったぜ。

まぁ、それもしゃあねぇか。あの頃はレースの賞金やメーカーなどなどのスポンサーとの契約金も湯水の如く毎晩遊んで使い果たしちまってたからなぁ？　一日一日が全力疾走、現役引退した老後の生活なんぞこれっぽっちも考えてなかったしなぁ……。

全く、悔やまれる人生だぜ。あの時真面目にコツコツと金を貯めてりゃ今頃バイク便の仕事なんぞしなくても楽々食っていけたし、第一あのクソ女とも籍を入れる必要も無かったんだからなぁ。無敵の世界王者様の成れの果ては娘二人を養う儚い働き蜂かよ、因果応報ってヤツかねぇ？　運命の歯車ってもんは上手い事出来てるもんなんだなぁ？

「……お客様、エコノミークラスでのアルコールのサービスは禁止されておりますので、代わりにこちらのノンアルコールビールで御了承下さい」

……ぐえっ、まっじい！　何だこのガキ騙しのシュワシュワドリンクはよ？　これならまだコーラかジンジャーエールの方がよっぽどマシだぜ！？　冗談じゃねぇぞ、貧乏人ってのはいつの世も報われねぇもんだなぁ。俺は遊びで沖縄くんだりまで来た訳じゃねぇんだぞ？　全く……。

……嘘だって？　はい、嘘です。若干遊びました。いや、かなり遊びました。別にいいじゃねぇかよ、やる事きっちりやったんだから少しは気晴らしさせろよ！　毎日毎日、娘の那奈や義娘の優歌、居候のクセにデカい面しやがるいづみ相手に男一人で立ち振る舞うこっちの身にもなってみろ！　翔太は完全に女どもに尻に敷かれちまってるし、色々と大変なんだぞぉ！？　これでも虎太郎パパ頑張ってんだよ、多目に見ろよバカ野郎が！！

……あれ？　俺、何か大事な事を忘れているような気がするなぁ？　何だっけ？　ここは誰？　私はどこ？　あぁ、ババアの話か。ババアなババア、おっ死んじまったあのクソババアな。どこまで話したっけ？　何か面倒くせぇな、やっぱり話すのやめてもう一眠りすっかなぁ……？

「いつまで寝てんだい、このすっとこどっこいが！！」

……はいはいはいはいはい！　話すよ、話せばいいんだろ！？　こ

のままじゃマジでババアに呪い殺されちまいかねねぇからな、こんないい加減な文章で小説にも成り立たねぇ小話を聞きたい輩がいるかどうか知らねぇが、とりあえず続きを話してやるよ。

確かあの後、酔っ払った俺は面倒な役割を新作に任せて家の縁側に寝転んで爆睡こいてたんだよな。んで……。

「いつまで寝てんだい、このすっとこどっこいが！！」

「うぇあぅえぅえっ！？　いってぇ！！」

そうだ、結局これだ。気持ち良く寝ている俺の尻を、あのクソババアが庭から持ってきたスコップでフルスイングしやがったんだ。タイガーウッズの比じゃねぇぜ？　軽く四百ヤードオーバーのナイスショットだったぜ。

「いい働き時の男が、朝っぱらから酒に酔って居眠りとは情けない限りだねぇ！？　あたしゃお前をこんな男に育てた覚えは無いよ、この親不孝者めが！！」

「ざっけんなよ！　ババアだってさっきまで疲れ果ててていびきかいてグースカ寝てただろうがよ！？　人の事言えんのかゴラァ！？」

「育ての親に向かってババアとは何事だいこのクソガキがぁ！　悲しいが人間ってもんは歳を取っていくとな、自然と夜更かし出来ずに眠くなってくるもんなんだよ！　お前はまだまだ若いだろうが！？　一日くらい寝なくたって死にやしないさ、さっさと起きて少し

は無駄についたそのバカ力をあたし達の役に立たせな！！」

「いってぇー！　一眠りした途端に元気になりやがってこのクソババア！　わかったよ、わかったから人の尻をバシバシ叩くな！　いってぇーって！！」

目が覚めると、時刻はもう昼過ぎを回っていた。空は雲に覆われて辺り一面はいまいちパッとせずもの暗い。そこへもって、窓から外を見ると相変わらず防御盾を構えた警官や機動隊が家の周りの包囲していた。

「おーう虎太郎、今お目覚めかいな？」

残り酒でガンガンする頭を押さえて居間に入ると、新作がダラダラと畳にうつ伏せになりながらノートパソコンをカタカタと操作していた。歩美姉とその娘、そして今回の騒動の原因である坊主に至ってはちゃぶ台を囲って呑気に昼間っから鍋なんてつついてやがる。何だコイツら、今自分達が置かれている状況をちゃんと理解出来てんのかぁ？

「オイオイオイ！　周り一辺を警察に包囲されてるっつぅのによ、随分とお気楽な立て籠もり犯どもだなぁ！？　いつ家の中に突入されるかわかったもんじゃねぇのに、いくらなんでもお前ら警察ナメ過ぎじゃねぇか！？」

「何を言うてんねん、自分かてさっきまでガーガー爆睡しとったや

ないかい！？　大丈夫やて、突入は無い、有り得へん、絶対にな！」

「……ハァ？　ちょっと待て、新作、お前何をした？」

過去の大騒動を思い出した俺は新作からパソコンを取り上げその画面を見ると、ドクロの顔に三つ編み姿の奇妙なマスコットが次々と他のサイトにアクセスをしてトゲトゲハンマーで跡形無く破壊していく様を確認出来た。

「……お前、まさか、またやったのか……？」

「せやでぇ～？　お前が寝とる間に俺はせっせと警視庁や各テレビメディアなどなどの正式サイトに不正アクセスして、新作ちゃん特製の『滅殺魔女っ子ドクロちゃん』ウイルスで機能不能に陥れてやったんやでぇ？　もう日本中の情報機関は完全にダウン状態、全てのコンピューターサーバーの管理は今、俺の指先一つでどうにでもしたい放題やでぇ！」

「……お前……」

「んでな、ウイルスと一緒に『立て籠もり犯はグリーンベレーの特殊訓練を習得済み』とか『高機動汎用型モビルスーツを装備している』とか『犯人はスティーブン・セガール並みに不死身』とかある事無い事いっぱいたくさん嘘情報とかもあちこちに撒き散らしてきたからな、もうヤッコさん達はどれか本当の情報かわからんくなって突入出来ずに立ち往生って訳や！　どや、結構立派なええ弾幕貼れたやろ！？」

……またやりやがった。この男、松本新作は以前今回と同じ様に国内のみならず海外のサーバーにも不正アクセスをして、情報操作どころか株価や通貨のレートも狂わせ世界中の経済界を大混乱に陥れた前科がある天才ハッカーの異名を持っている。どうやらジャーナリストとして世界中を飛び回っていた時に、あるルートの組織の人間から学び身に付けたものらしい。その根拠は有料エロ裏サイトに不正アクセスする為だったらしいのだが……。
前回の時は日本経済界の首領である奥井幹ノ介との因縁の対決をしていた当時の俺の為に援護射撃としてやってくれたものなのだが、そのバラまいてくれたウイルスのお陰で完全復旧までに一週間以上の時間を費やす事になり、その間も経済並びに情報システムはさらに混乱してあわや世界大不況を引き起こしかねない状況に陥った。あの時の後始末は俺も相当苦労をさせられた記憶がある。

「……それをお前はまたやったのか？　やっちまったのか？　こんなガキ一人の冤罪を晴らす為だけに？　あーあ、俺は知らねぇぞ、今回ばかりは俺は何にも関与してないからな、知らねぇぞー、知らねぇぞー？　いーけないんだー」

「イケメンだー、フゥ～！　大丈夫やって！　今回はちゃんと自爆装置付きや！　とりあえずこの用件が済んだらボタン一つで綺麗さっぱりウイルスが消滅する様に改良してあるから安心せいや！？」

「……自爆？」

「そや、自爆、足跡残さんようにサイトごとな」

「それが大迷惑だって言ってんだよ、このバカ野郎！！」

あーあ、こりゃ明日の報道や日経の動きが楽しみだ。エラい事になるぞぉ、ただでさえ不況で頭痛い役立たずの総理大臣や日本銀行総裁がさらに涙目になっちまうぞ？　下手すりゃ内閣総辞職でみんな首吊っちまうんじゃねぇかこりゃ？

「現代の戦争は情報が全てってニュースで聞いたけど、本当にその通りなのね～？　私、新ちゃんが何か神様に見えてきちゃったわ～？」

「いやいや、こんな俺でもどうしてもアクセス出来へんものもあんねんで歩美姉ちゃん？」

「あら、それって何かしら？」

「……それは美しい女性のハートの中さ、女心だけはさすがの俺でもそう簡単には侵入出来へんのや……」

「……あらやだ、新ちゃんったら詩人なのね、私の心のアクセスコード、解明出来るかしら……？」

「……もちろんさ、俺の手にかかれば、あっという間に歩美姉ちゃんの両胸のボタンにダブルクリック……」

「歩美姉、鍋おわかりー」

「そんなもん自分でよそりなさい！　私はアンタの母ちゃんじゃないんだよ！」

「チッ、いつも新作ばかり甘い顔しやがって、欲求不満の年増女め、しっかしこの鍋うめぇなぁ？」

確かにあの時の鍋は美味かったなぁ。酒で廃れた胃袋には伊東の海で捕れた新鮮な魚の出汁が良く出た汁が良い感じだったぜ。これぞ五臓六腑に染み渡るってヤツだな。

「でも、やっぱり祖母ちゃんが育てただけあって新ちゃんはすげー男なんだなー？　なぁ武雄、あたしはパソコンとか良くわかんねーからこういう人見るとスッゴい憧れちまうよー！」

「……やってる事は立派な犯罪だけどなぁ」

「本当だな波子ー！　俺も魚の名前はわかるけど不正アクセスとかダブルクリックとか全然わかんねー！　これからの海の男はそういう事もわかんねーと駄目なんかなー？」

「だからコイツのやってる事はネット犯罪だって言ってんだろうがクソガキども！　ペチャクチャ喋ってねぇでさっさと鍋つつけつつけ！　俺の奢りだ、食え食え！」

「私が作った鍋だよバカちんが！　虎太郎、大概にしねーと久々に折檻しちまうぞゴラァ！！」

「うっせーな歩美姉も、グダグダ言ってねぇでさっさと鍋空けろよ！　これじゃいつまで経ってもおじやが作れねぇだろうがよ！？」

「おじやなんて食ってる場合じゃないんだよ、この出来損ないがぁ！！」

「ぶはっ！！」

お椀に盛られた鍋をすすって食っていたら、またもや鈴婆のスコップが今度の俺の後頭部に突き刺さってきた。その鋭い突き刺しはフェンシング銀メダリストも顔負け、お陰で鼻の穴から魚の小骨が噴き出しちまった。

「虎太郎！　啓介や新作は危険を省みず子供達の為に精を尽くしてやっているっていうのに、お前はここに来てから一つでも何か役に立ったのかい！？　うちは働かないぐうたら男にタダ飯を食わせる余裕なんて無いよ！！」

「あのなぁババア、じゃあはっきりと言わせて貰うがな、何でこの俺がいきなりやってきた見ず知らずのガキを助けてやらなきゃならねぇんだっつーの！？　そもそもこの一件は、アンタが逃げてきたこのガキを勝手に家の中に匿って、それを捕まえに来た警察に勝手に喧嘩を売りつけたのが全ての始まりだろうがよ！？　それを何で俺達がその尻拭いをしてやんなきゃならねぇんだ！？　あぁん！？」

まぁ、さすがの俺も育ての恩人相手だとはいえ完全にトサカにきちまったな。何せ役立たずのでくの坊のタダ飯食い逃げ泥棒みたいな言われ方をされちまった訳だしなぁ？　つっても、このババアの迷惑がましいお節介はこの時に始まったもんじゃなかったけどなぁ。

「おいおい虎太郎、それはあんまりに母ちゃんが可哀想やで……」

「てめぇは黙ってろ！　そうだ、てめぇもだ新作！　てめぇと啓介がこのババアに釣られて余計な真似をしたから事がこんなにデカくなっちまったんだぞ！？　こんな事して一体、俺達に何の得があるって言うんだよ！？　一体この状況、どうやって収集つけるつもりなんだ！？　あぁん！？」

「イヤイヤイヤ、俺と啓介が出来る事なんかちょっとしたお膳立てぐらいやもん、やっぱこういう非常事態には仕舞いに虎太郎兄貴がいつもみたいにこうドカーン！　って……」

「ざけんなてめぇ！？　俺は暴れん坊将軍でも水戸黄門でも何でもねぇんだよ！　いいか、良く思い出せ、俺達は何もここに人助けの為にやってきたんじゃねぇんだよ！　せっかくの少ない貴重な休みを使って、せめてもの親孝行としてババアや歩美姉達に元気な面を見せにやってきたんじゃねぇのかよ！？　しかもそれはてめぇが一番最初に言い出したんだからな、新作！！」

「虎太郎！　もし、それ以上新ちゃんを責めたりしたら私が許さないよ！？　新ちゃんも啓ちゃんも間違いを正す為に母さんの気持ちを汲み取って……」

「女がグダグダと話に割り込んでくんじゃねぇよ！！　もう面倒臭ぇから新作も歩美姉も裏の部屋行って勝手にズコバコヤッてろクソ野郎ども！！」

「あのなぁ虎太郎、俺と姉ちゃんの会話はただの言葉だけのやりと

りを楽しんでるだけやで？　それをまだ未成年の子供の前でそない破廉恥な言い方……」

「あぁ、そうかいそうかいそうかい、んだったらついでにこのガキ二人も一緒に連れてって、手取り足取り学校じゃ教えてくれないレベルの性教育をつけてやれよ！？　この娘っ子に『アンタはここから産まれてきたのよ～』って奥の奥まで観察させてやれよ年増女！！」

「何て下品な喧嘩文句！　これだからおめぇは可愛くねぇんだよ虎太郎！！　謝んな、今すぐ私と母さんに謝んな！？」

いやいや、自分でも大人気ねぇったらありゃしねぇ。久々に頭に血が上っちまって普段の生活のストレスが一気に噴き出しちまったんだよなこの時は。それだけ俺にも当時は家庭内の出来事で心労が溜まってたんだ。俺自身がこんな性格だから周りには信じて貰えねぇだろうがな。

ちょうどあの頃、俺の家庭では非行に走っていた優歌がやっと人前の女として落ち着いてきた頃だった。その姿に俺も一安心していた矢先、ちょっとした暴力団絡みの事件が起こって優歌が巻き込まれちまったんだ。俺が助けに行った時には優歌はヤツらにリンチされて虫の息になっていた……。

その暴力団どもは俺と昔に俺が世話になった頼りになるある刑事と共に全員残らずボッコボコにして日本国内から追い出してやったんだが、関心の優歌の傷を癒やしてやるまでの事はしてやれなかった。つまり俺は父親として力量不足の失格の烙印を天から押されちまった訳だ。

己の不甲斐なさに絶望したよ。情けなかった。いづみを始めとする仲間達の励ましも聞こえねぇ、緊急帰国してきた麗奈の顔もまとも

に見れねぇ、しかも心配して俺の側に寄り添ってくれていた那奈には未だにこの事件の真相を話せないままでいる始末だ。
生涯決して忘れる事の出来ない大切な人間から預かった大切な娘なのに、俺はアイツをまともな一人の女性として育ててやる事がちっとも出来てねぇ。後悔に後悔を重ねる毎日、とても他人の話にまで介入する余裕なんて無かったんだ。だから、例え里親の頼みだとしてもこの一件に関わるのは正直面倒臭かった。

「これでも俺はせめてもの恩返しと思ってアンタの元に帰って来たんだぞ！？　それが何だこの様は！？　何が出来損ないだ、何が親不孝者だ！？　俺達の感謝の気持ちを踏みにじって憩いの場をムチャクチャにしてくれたのはアンタなんだぞ！？　里帰りしてきた息子達をまともに出迎えられねぇどころか、訳わかんねぇ面倒な事を無責任に押し付けてくんじゃねぇよこのクソババア！！」

だからって目先の人間に当たり散らしたらいけねぇよな。でも、俺の一っ通りの言い文句をババアは目をつぶり黙ったまま聞いてくれていた。俺としてはかなり本気で気迫を込めて食いかかったつもりだったんだが、そんな気迫に微動だにせず腕を組み仁王立ちしているババアは静かに目を開けると溜め息一つついてポツリと一言漏らした。

「……堕ちたもんだね、虎太郎」

「……何？」

「……あたしが知っている渡瀬虎太郎は、そんな女々しい戯れ言な

んて一言も言わなかったもんだけどねぇ？　おかしい、間違っている、こんなもんは納得出来ねぇ、そう思い込んだら誰が相手だろうと狂犬の如く相手の喉元に噛みついていく勇敢な男だったはずなんだけどねぇ？」

「……いい加減にしろよ？　俺だっていつまでもバカばかりやってる場合じゃねぇんだよ！　家庭の事、嫁の事、娘達の事、それだけじゃねぇ！　貴之の代わりにその嫁の面倒、そしてその息子にもバイクの練習と三度の飯を食わせてやらなきゃならねぇ！　さらに言わせて貰えばな、プロライダーとして世界中を駆け回ってた頃から奥井の連中どもと闘っていた頃まで、俺は少しも休む事無く突っ走り続けてきたんだよ！！　いい加減に休ませろ！！　俺ばかりに面倒な話をふっかけてくんじゃねぇ！！　俺はスーパーマンでも仮面ライダーでも正義のヒーローでもねぇ、てめぇらと何一つ変わらないただのちっぽけな一人の人間なんだよ！！」

「甘えんじゃないよ！！！！！」

「……！！」

ババアは肩に担いでいたスコップを床に投げつけると、その手で俺の襟首を掴み上げてこちらを睨みつけてきた。歳のせいかその瞳は若干白く濁りかけてはいたが、その鋭い眼光は色褪せる事無く健在で、襟首を掴むその力はとても九十近い老婆とは思えないほどのものだった。

「休ませろだぁ！？　バカな事を抜かすんじゃないよこのクソガキがぁ！！　いいかい、人生ってもんにはな、ちまちまと休憩なんか

取ってる余裕なんてありゃしないんだよ！！　どんなに疲れていたって、どんなに苦しくったって、容赦なく誰にでも明日はやってくるんだよ！！　この世で人として生きていくのならば、どんな時でもその日一日を全力で生きていかなきゃいけないんだよ！！　どうでもいい、いい加減に過ごしていい時間なんて一つもないんだよ！！」

それは、俺が単調で平凡でありふれた生活と言う繰り返しの中でいつの間にか忘れ去ってしまっていた人間の情熱の塊だった。誰にも媚びず、群れず、時代の流れに逆らい、強大な力にも潰されずに常に立ち向かって生きてきたこれまでの俺の生き様そのものだった。父親に捨てられた俺を女手一つで一人前に育て上げてくれたババアが教えてくれた人生の教訓だった。

「お前は今まで一日も無駄に過ごす事無く全力で駆け抜けてきたんじゃないのかい！？　だから一つの世界で頂点まで駆け上る事が出来たんじゃないのかい！？　だからあれほど巨大な財力を誇り残忍なやり方をしてきた奥井に対しても立ち向かう事が出来たんじゃないのかい！？　だからこれまでの人生を勝ち残ってこれたんじゃないのかい！？」

「……」

「虎太郎、今のお前はね、牙を抜かれちまったひ弱な虎だよ！　なれもしない真面目な父親なんか演じようとして丸くなっちまった飼い猫だよ！！　お前はまんまとあの気丈な嫁に上手く手懐けられちまったのさ、お前の負けだよ、虎太郎！！」

「……な、にぃ！？」

「お母ちゃん、アカーン！　虎太郎に麗奈の話をしたら、コイツホンマにキレよるでぇ！？」

俺が一番言われると我慢ならねぇ事、それは好きで結婚なんぞした訳でもねぇ俺の最大の宿敵であり常に目の上のたんこぶであり続けている嫁、麗奈と比べられる事だ。ヤツはこの無敵の俺様をいつも見下し、決して敗北を認めずに俺に刃向かい続ける。俺より優れた人間がこの世にいる訳がねぇ、ましてや女なら尚更だ！！

「……俺が、ヤツに負けた、だと？」

「そうだよ、お前の完敗だよ！　情けないねぇ、暴虐理不尽の恐怖の帝王の異名で呼ばれた世界バイク王者も、成れの果ては嫁に尻敷かれる子育てパパかい！？　お前の今の腑抜けな姿を見たら、お前に全てを託してくれた優人（まさひと）や歌月（かづき）は一体何て思うだろうねぇ……？」

「……てめぇぇぇぇ、ババアぶっ殺すぞぉぉぉぉ！！！！！」

「アカンアカンアカーン！　お母ちゃん、その二人の名前も言ったらアカーン！！」

俺は怒りに任せて止めに入った新作を押しのけババアの着物の襟首を掴み返すと、そのまま自分より小さくなっちまったババアの体を力任せに持ち上げた。しかし、ババアは完全に足が宙に浮いた状態になったにもかかわらず、ちっとも取り乱す事無く俺の目を睨みつ

けたままだった。

「虎太郎、もしお前があの乱暴されそうになった娘の父親だったとしたら、お前どうするつもりだい？」

「ハァ？　わかりきった事聞くんじゃねぇよ、犯人捕まえてボコボコにシバくに決まってんだろうが！？」

「そうだよねぇ、そんなヒドい話、黙っている事なんて出来ないだろうねぇ？」

「だから、何が言いてぇんだよババアゴラァ！？」

「じゃあ、他の人の娘だったら面倒臭ぇって見て見ぬ振りすんのかい！？」

「……！！」

……そうだ、俺は今回のこの一件の様に人間の勝手や欲望や悪意によって大切な娘を傷つけられた。そして、その無念を晴らす為に代わりにその相手に対して報復をした。もちろん、優歌を苦しめたヤツらが憎かったのもあったが、それ以上に同じ男としてヤツらのやり方を許す事が出来なかったからだ。これは一人の男としての俺のけじめ落としだった。

「……いいかい虎太郎、啓介も新作も、あたしに言われたから、頼まれたから嫌々協力している訳じゃないんだよ？　同じ年頃の娘を

持つ父親として、乱暴を働いた戯け者達を許す事が出来なかったんだよ？　そうだろ、新作？」

「……う、う、うん、ま、まぁ、言われてみれば、そうかもしれへんかなぁ……？」

「はっきり返事をしんかい、新作！！」

「お、おう！　若くてお肌ピチピチのウブな女子校生に対してやましいイタズラをしようだなんて何て羨ま、いや許せへん！　新作パパ、愛する翼と岬の為に悪者に正義の鉄槌を食らわせてやんねん！！」

「どうだい虎太郎、お前は実際に預かった大切な娘を傷物にされた経験があるだろうに？　それなのに、お前の心にはあの娘の助けを求める訴えの声は届かないのかい？　あの娘を必死に悪等どもから守りきってきた武雄の叫び声は届かないのかい！？　お前の心の扉はそんなにまでに錆び付いちまったのかい！？」

「……」

……何も反論出来なくなっちまった。俺は静かにババアを下に下ろすと、掴みかかっていた手を離して自分の腰の上に添えた。

「……俺には、関係ねぇんだよ……」

「……そうかい、ならもういいよ、お前に頼ったあたしが愚かだったよ、悪かったね」

ババアはそう言うと床に転がったスコップを拾い上げ、不安そうにこちらを覗き込むガキ達の側に寄り添って頭を撫でた。

「……鈴子婆さん、俺、本当に濡れ衣晴れるのかなー？」

「……祖母ちゃん、武雄は捕まったりしねーよな？　本当の犯人が捕まってちゃんと自由の身になれるよな？　あたしヤだよ、武雄が捕まったりしたら困るよー！？」

「大丈夫だ、祖母ちゃんに任せろ！　お前達を警察なんかに連れて行かせない、指一つ触れさせてやらないよ？　お前達はあたしの子供だ、あたしに頼ってくる人間はみーんなあたしの子供だ！　子供が一生懸命頑張ってんのに親が先に弱音なんか吐けるか！　絶対に祖母ちゃんがみんなを守ってやるよ、絶対だ！！」

俺は苛立っていた。もちろん、ババアに対してじゃない。警察に対してでもない。世界に対してでも、神に対してでもない。自分自身に対してだ。俺は結局、心労を言い訳にして目の前に現れた人生の壁に対して逃げようとしていただけだった。
あの事件以来沈み込んでいた優歌も、最近は何かを振り切った様に自分の得意分野である格闘技団体のジムで汗を流し立ち直りつつあった。なのに、俺はグズグズと一人だけくすぶり後悔の念に苛まれてるまんまだ。
今思い出してみても情けない。あの時、俺はアイツを励ましてやれるどころか、逆にアイツに励まさせていたのかもしれない。俺に必要だったのは中途半端な優しさなんかではなく、そんな苦しみすら

吹き飛ばしてしまえるほど無鉄砲に生きていく潔さだったんだ。
闘いの日々で徐々にすり減り、唯一無二の親友である貴之を失って鳴りを潜めちまった本来の俺の姿。どんな相手だろうと叩き潰してきた、あの理不尽暴虐な怖いもの知らずのあの時の俺……。

「……あー、あー、立て籠もり犯に告ぐ！　私はこの隊を指揮する静岡県警機動隊隊長、三河晃である！　お前達の要望通り静岡県警警視監補佐、田巻正男が現場に到着した！　警視監補佐、犯人との交渉をお願い致します！」

家の外からハウリングがするほどの大音量のメガホンの声が聞こえてきた。どうやら警察の方に動きがあったらしい。周囲には警官や機動隊だけではなくロープで一線引かれた場所にはテレビ局の報道記者や近所の野次馬達も大量に集まってきていた。

「あー、只今紹介をされた県警の田巻である、犯人に告ぐ、何やらいい加減な情報で情報メディアを撹乱し私の息子に罪を押し付けているようだが、全くもって事実無根の戯言である！　このような理不尽かつ無差別な行為、お前達に有利な交渉は無いと思え！　立て籠もり犯は速やかに人質を引き渡し投稿せよ、でなければ強行突入も考慮に入れる事になるぞ！」

「来やがったね、待ってたよこの諸悪の根源め！　何て高圧的で偉そうな態度だい！？　こんな世間知らずのバカ親がいるから、息子がろくな人間に育たないんだよ！　この森川鈴子様が、親子揃ってそのひん曲がった根性を叩き直してやるよぉ！！」

「母さん、一人じゃ危ないわ！　ちょっと待って！？」

「鈴子母ちゃんチョイ待ち！　ちゃんと俺達にも作戦ってもんがあるから勝手な行動は、って、ちょっと待ってや～！？」

いかにも鼻に触る憎たらしい喋り方をする黒幕の声を聞きつけたババアは、頭に手拭いを巻くと気合いを入れ直してスコップ片手に玄関から外へと飛び出して行った。
それに慌てて新作と歩美姉が続く。啓介はまだ帰ってこない。自分の心の闇に潜むもう一人の弱い自分との決着を落としきれない俺を後目に、ついに待った無しの戦の火蓋は切られる事になった。

下

「マスターK、お時間がかかりまして申し訳ございません、出発の準備が整いました」

「……ご苦労、要人の手筈は……？」

「こちらは順調に進行しております、要人確保後速やかに陸路にて現地に向かい、警戒レベル『5』にて緊急移送中です」

「……了解した、ん？　何かいまいち腑に落ちない顔をしているな？　質問があるなら遠慮せずに言ってみろ……」

「……はい、お言葉ですが私には少しわかりかねます、なぜマスターKほどの地位と名誉を手にしたお方がこの様な一般庶民的な小さな事件に関わり、さらには影で行動している我々セーフティーガードにまで出動を命じたのか……？」

「……育ての親、恩人の一大事だ、黙って見ている訳にはいかないだろう……」

「しかし、もし我々が現地に駆けつけた頃に、すでに警察による強行突入が開始されて場の収集がつかない状態になっていたとしたら、いかがなさるおつもりなのですか？　最悪の場合、この事件をきっかけに『真中啓介』の名は世間を騒がせた人物としてマスコミのスキャンダルの的にされ、これまで積み重ねてきた地位や名誉に傷をつけられてしまう可能性があります、それによって『サンライズ・

ファクトリー』の企業価値の低下や各メディアとの契約に支障が出るような事があれば、それこそ一大事になりかねません……」

「……言いたい事はわかる、だが心配するな、その可能性は無い、警察の突入は新作が食い止めてくれている、そして、俺が現地に到着する頃には虎太郎が全ての不利な状況を一掃してくれているだろう……」

「……それもわかりかねます、なぜ、マスターはそこまで松本氏、そしてあの渡瀬氏を本心から信頼出来るのですか？　マスターにとられては実の兄弟の様に接してこられた親愛なるお方々、以前に世界で活躍された人間だとはいえ、我々には今一つあの渡瀬氏という人物の偉大さが理解出来ません……」

「……誰もがそう思うだろう、しかし、人は見た目や言動だけでは判断出来ないものだ、俺は実際にこの目でずっと見てきた、あの男はどんな時も守るべき者達の為に立ち上がってきた、例え相手がどんなに強大だろうと、どんなに苦難な逆境に立たされてもな……」

「発進します！　各自、離陸態勢を！」

「……続きは後だな、了解した、可能なだけ最短距離、最短時間で現地に急行せよ……！」

「了解しました！」

啓介が全速力でこちらに向かって来ているその頃、事件が起こっている現地では赤色灯を回す大量の緊急車両と機動隊相手に鈴子ババアが一人大声を上げて喧嘩文句を並べまくっていた。とても御歳九

十歳とは思えんその威勢の良い饒舌の前に、辺り一面を取り囲む警官達も怯むと言うか呆気に取られて放心顔。

「やいやいやい！　アンタ、田巻とかいったね！？　自分の不出来な息子が仕出かした悪さをもみ消す為に、何の罪の無い一般人の子供に対して濡れ衣を着させるなんてふざけた真似をしてんじゃないよ！　それでもアンタは警官の端くれかい！？　警察ってのは困っている国民を守る為にあるんじゃないのかい！？　そんな帝国主義みたいなふざけた職権乱用、この御時世に許されるとでも思ってんのかい！？　あぁん！？」

若者どもの不良グループに婦女暴行寸前で助けられた少女と武雄とかいうガキが森川家に逃げ込んできてから丸一日、やっとその不良グループの頭のクソガキの父親である県警のお偉いさんらしきジジイがここにやってきた。
しかしまぁ、このジジイの面が雷おこしみてぇなひでぇしかめっ面の悪人顔で、厳つい眼鏡に白髪頭。いかにも二時間ドラマに出てきそうな会話の通じない嫌味でカチカチ頭の上司って感じでよ、ババアの気迫に周りの連中は腰が退けてんのにコイツだけは人事みたいによそよそしい態度でどこ吹く風だ。

「濡れ衣とか職権乱用とか、一体何の話だね！？　私の息子が何か犯罪を犯したみたいな言い分と、何やら事実無根な中傷に近い嘘まみれの報道が世間に流れているが、何を根拠にその様な虚言を述べている！？　これは立派な名誉毀損にあたるのを承知の上での発言か！？」

「白を切ってんじゃないよこの堅物が！　か弱い娘っ子がアンタの息子に暴行されかけたところを助けた武雄に対して、自分の部下達に逮捕を命じて追い回させたのはどこのどいつだい！？　捕まえた後に乱暴な取り調べをして、嘘の自白をさせて武雄を犯人にでっち上げようとしたんだろうが！？　権力を利用して弱い者イジメする腐った人間のする事なんざ、この森川鈴子様が全てお見通しだよバカもんが！！」

「婦女暴行？　はて、そんな事件は一つたりともこちらには通報も報告もされていないがな？　婆さん、一体何の話だね？　何か夢でも見たんじゃないのかね？」

「な、何だって！？　アンタ、どこまで腐った男なんだい！？」

ついには暴行未遂の話すら無かった事にしようとし始めやがった。確かに、実際に暴行されかかったあの学校帰りの少女は警察に被害を通報した訳では無いし、この様子だと目撃者も彼女を助けたあのガキ以外居そうに無い。しかも、その襲われた娘当人が真犯人探しで啓介がどこかに連れて行っちまったから、今現在こちらの言い分を後押しする証拠は何も無ぇんだよなぁ。

「憶測や妄想だけで人を犯罪者呼ばわりするとは甚だしい限りだ！　そこまで言うなら私の息子が暴行事件を起こしたという証拠を私の目の前に出してみるがいい！」

「……そ、それは、今、あたしの息子達が真犯人を探して……」

「第一、その話と今回のこの立て籠もりと一体何の関係があると言

うのか！？　個人の勝手な思い込みにより関係の無い一般庶民を巻き込んで危険に晒すなど、決して許される行為ではない！　我々警察はボケ老人の相手をしてるほど暇ではないんだ！　庶民の平和を守る為、我々警察はどの様な犯罪に対しても断固として屈したりはしないぞ！」

まるで国際テロリスト犯でも扱うような高圧的な態度だ。この圧倒的不利の現状じゃ、さすがのババアも滑舌が鈍り次第に言葉が詰まり出してきた。新作がネット上にバラまいたこの白髪頭のバカ息子の隠された過去の悪事の真実も、マスコミによって裏付け調査が進み次第に調査が進んでいるみたいだが、警察の力によって情報規制されているのかテレビの中継での俺達の扱いはまだ凶悪な無差別立て籠もり犯の扱いで報道されているみたいだ。

「俺の以前からの人脈を通じてマスコミの各社があの警視監補佐の息子の素性を嗅ぎ回り始めてるとはいえ、それがいざ表沙汰になるにはまだまだ時間がかかりそうやな、この状況のまんまやとちょっと俺達ヤバいかなぁ……？」

「……つまり、それって新ちゃんが何とか防いできた強行突入の可能性が出てきたって事なの？　そんなのイヤよ！　母さんや波子を危険な目に合わせる訳にはいかないわ！　男の人がたくさん家に踏み込んで来たりしたら、私どうなっちゃうかわからない……！」

「……まぁ、歩美姉ちゃんはいざ本気モードになれば機動隊十人くらい平気でやっつけられるやろうけどなぁ？　でも、子供達はそうはいかんし、さすがの母ちゃんもこの歳じゃ以前のクソ力は残ってないやろうしなぁ……？」

「新ちゃん、私達はどうなるの！？　一体どうすればいいの！？」

頭を掻いて困り果てる新作に、歩美姉達はすがる様に集まりこの後の展開を不安視していた。特にこんな修羅場を今まで経験してないだろうガキ二人は完全に涙目になって震えている。その様子はまるで空襲に怯える戦時の子供達の映画のワンシーンの様だった。

「お、俺、やっぱり今から警察に出頭するよー！　これ以上、波子やみんなに迷惑かけられねーもん！　俺が出てけば全部終わるんだろー！？」

「ダメだ、ダメだダメだー！　そんな事したら相手の思うツボだー！　なぁ、祖母ちゃん言ったよな？　あたし達を助けてくれるんだよな？　守ってくれるんだよな？　なぁ、祖母ちゃーん！？」

「……波子、大丈夫だ、祖母ちゃんを信じろ、そして……」

「……そして……？」

「……あたしの息子、あの馬鹿タレを信じるんだ……！」

「……馬鹿、タレ……？」

「……そうなんやで波子ちゃん、俺達には世界で一番アホで無鉄砲でワガママで、そんでもって世界一強い無敵の男が側にいてくれているんやで……！？」

「……アホで無鉄砲でワガママで、世界一強い？　新ちゃんのおっさん、それって……？」

この状況でも、ババアの表情は決して曇る事は無かった。親不孝者、出来損ない、散々言ってもババアは信じてくれていた。自分の損失や身の危険も省みずに真実の為に行動を起こした親愛なる兄弟達、啓介も、新作も、心から信頼してくれていた。

「目的地、確認しました！　下降します！」

「マスターK、報告します！　移送班、予定通り現地に接近！　十六時ジャストに作戦決行します！」

「……了解した、準備に取りかかるぞ……」

「……本当に現地は無事でしょうか？　はたしてマスターの言われる通り、渡瀬氏は動きますか……？」

「……信じろ、あの男を！　これまでも俺達が逆境に立たされ、途方に暮れた顔をすればするほどアイツは……」

「……強気な顔で舵を取る！　それが俺達の頼れる兄弟、渡瀬虎太郎っていう男の中の男なんやでぇ、波子ちゃん！」

「……男の中の、男……？」

この時、一人家の中で立ち尽くす俺の腹ん中には沸々と抑えようの

ない強烈な怒りが込み上げてきていた。今までの己の不甲斐なさに苛つき、その過去の己に縛られ動けなくなっていた今の自分に対する苛つき、そしてこんな俺を信じてくれている者達を脅かす身勝手な暴威に対する苛つきが、昔から根付いている強き者達に対する反骨精神と一体化して怒りのマグマが爆発寸前にまで沸騰し切っていた。

「三河隊長！　突入班、配置完了しました！」

「……田巻警視監補佐、本当に強行突入されるおつもりですか？　相手は何の武装もしていない丸腰の一般人です、それでも……？」

「何を言うか！？　すでに内部に人質がいない事は明白だ！　あそこにいるのは全員が危険で悪質な犯罪者だぞ！？　遠慮などするな、抵抗する者は容赦無く検挙せよ！！」

「……しかし、しかし警視監補佐！」

「ええい、命令が聞けんのか！？　ならばメガホンをこちらによこせ！！　あーあー、立て籠もり犯に告ぐ、今から一分後に強行突入を決行する！　これが最終警告である、速やかに投降せよ！」

「隊長、全隊員に突入指示を！」

「……くっ！　これが本当に弱き人々の為に存在する我々警察がすべき正しい道なのか……！？」

そこに、警察の挑発がさらに火に油を注いでくる。何の武装もして

いない一般人に対してこの暴挙、俺がガキの頃に荒れていた時ですら警察にも少しは人情ってもんがあったもんだ。人を人として扱わねぇやり方なんぞとても認める訳にいかねぇ。俺の触れちゃいけねぇ錆び付いた開かずの心の扉に土足で踏み込みノックすんのはどこのどいつだぁ！？

「全隊員に告ぐ！　立て籠もり犯以外も、反抗する者は全て公務執行妨害現行犯として検挙せよ！　女子供とて容赦はするな！」

「……てめぇよぉ……」

「人々の安全を脅かす凶悪犯を絶対に許してはならない！　今こそ、警察の威厳を国民に知らしめる恰好の舞台である！」

「……自分の子供の教育もろくに出来てねぇクセに……」

「我々警察は正義をもって徹底的に悪を粉砕する！　我らこそが正義だ！　我らこそが力だ！　時間だ！　突入、開始…！」

「生半可な正義語ってんじゃねぇぞ、クソ野郎ぉぉぉぉ！！！！！」

ガリガリガリガリ！　ドゴォーン！！！！！

「……う、うわぁぁぁぁ！！！！！」

「……ぐぇっ！　ぐふっ……！！」

正直、この時は頭に血が上っちまって自分で何をしたのか良く覚えてねぇんだ。何やら家の中にある物を引きずり出して外の機動隊達に向かってブン投げたみたいなんだがな、後々落ち着いてから歩美姉に滅茶苦茶怒られたのは覚えている。

「襲撃、襲撃！　メーデー、メーデー！！」

「何事だ！？　一体何が起こった！？　報告せよ！？」

「隊長！　桐箪笥です！！　一丈以上の大きさの箪笥がこちらに向かって投げ込まれてきましたぁー！！」

「き、き、桐箪笥だと！？　あの家の中にはゴリラでも飼っているのか！？」

「隊長！　突入隊が箪笥の下敷きになって身動きが取れません！突入隊、全滅～！！」

「おい三河、何が起こった！？　突入はどうした！？」

「……警視監補佐、突入隊が、全滅しました……」

「……何、だと？」

どうやら俺達の気づかない間に家の玄関の下の階段付近に何名か突入隊が陣取っていたみたいだ。しかし、そのほとんどが箪笥の下敷きになってドミノ倒しの様に階段を転げ落ちていった。運の悪いヤ

ツらだな、狙って投げた訳でもねぇのにそんな場所にいやがるから巻き込まれんだよ、バーカ！！

「オラァてめぇらクソったれが℃¥$¢£で％#&@§だ文句あんならかかって来いやゴラァァァァ！！！！！」

「な、な、な、何だあの野獣は！？　一体誰だ貴様は！？　家の中から突然出てきたと思いきや我々警察に対してこの暴力行為、こんな事をしてただで済むと……！」

「グダグダ抜かしてんじゃねぇぞ、この腐ったチンカス野郎どもがぁぁぁぁ！！！！！」

「……チ、チンカス……！？」

「ガタガタ抜かしてんとてめぇら一人ずつのケツの穴に手ぇ突っ込んで、胃袋掴み上げて裏返しにひん剥いてやんぞゴラァ！！　それともなきゃてめぇら全員のキンタマ引っこ抜いて、手のひらでコロコロ回してやろうかクソ野郎ぉぉぉぉ！！！！！」

「……今度はキン……、貴様、一体何なんだ！？　私が静岡県警警視監補佐、田巻正男と知っての……！」

「てめぇの役職や名前なんかどうでもいいんだよ、このインキン野郎！！　ゴチャゴチャごたく並べてねぇでさっさとその臭ぇ口を閉じて黙りやがれ！！　いちいち臭くて虫酸が走るんだよクソったれぇぇぇぇ！！！！！」

「……何と汚い言語だ……！」

こうなったからにはもう俺を止められるもんは何もありゃしねぇ。下品だろうとお下劣だろうと放送禁止用語だろうと関係ねぇ、この俺様に盾突く輩は誰であろうと木っ端微塵に吹き飛ばす！　それが俺流、世界に恐れられた理不尽大魔王、渡瀬虎太郎様のやり方だぁ！！

「うはは、キタキタキター！　ついに眠れる獅子を起こしてもうたなぁ！？　やっぱりそれでこそや、それでこそ俺達が頼れる兄貴と信頼する天下無双の極悪人、渡瀬虎太郎やでぇ！！」

「おうよぉ！　待たせたな兄弟！　俺が来たからにはもう心配ねぇ、ババアや歩美姉の手を汚すまでもなくこんなクソったれチ〇コ野郎どもは全部、片っ端から綺麗サッパリ片付けてやるぜぇ！？」

「各隊員に告ぐ、危険過ぎる、一旦退却せよ！　繰り返す、全員退却せよ！！」

家が建つ丘の上に仁王立ちする俺の威勢の前に、周りの機動隊達は怯んで家から離れてカチカチに身構えちまった。ケッ、最近の警察は人情どころか熱い闘争心すら無くしちまったみてぇだなぁ？　まぁ、その方が俺としても好都合だ。命令に従っているだけの真面目な公務員のワンちゃんをイジメたら可哀想だしなぁ？　俺様の狙いはただ一つ、車両の影に隠れて減らず口を叩きまくっていたあの白髪頭の警視監補佐の首だけだぜぇ！！

「オイ、白髪頭！　おめぇだおめぇ！！　てめぇよ、自分がやってた事を棚に上げてよくも人様を犯罪者呼ばわりしてくれたなぁ！？　しかも挙げ句の果てには正義が力がうんたらかんたらだと？　笑わせんじゃねぇよ、カメムシみてぇな面の分際でふざけた寝言ぶっこいてんじゃねぇぞゴラァ！！」

「し、失礼な、何を言うか！？　貴様らは先程から事実無根の言いがかりばかりほざきおって！　私が自らの地位と権力を私情に利用した事など一度たりとも……！」

「ハァ！？　いつまでも言い逃れ続けられると思うなよクソ野郎！！　事実無根かどうかはてめぇが一番良く知っているだろうが！？　自分の胸に手を置いて良く耳を澄ましてみやがれ！　聞こえるだろう！？　てめぇの歪んだ心の中に巣くう愚者どもの呻き声が、そして今まで裏切り踏みにじってきた弱き者達の悲しみと怒りの叫び声がよぉ！！」

「……知らん、そんな話は知らん！　しょ、証拠を出せ！　そこまで言うならこの話を確証づける証拠を……！」

「証拠だぁ！？　そんなに証拠が欲しいか！？　じゃあ聞くがな、その証拠ってもんを見せりゃてめぇは今までの話を全部素直に認めるんだなぁ！？　この全国生中継のテレビの前にいる世間の皆様方に向かって『あたしが悪ぅ御座いました、許して下さいませ』ってその額を地面に擦り付けるんだなぁ！？　言っとくがな、素直に謝るなら今の内だぜ？　全てが公になってから泣きベソかいても知らねぇぞぉ！？」

「……何だ！？　こちらに近づいてくるあの車の列は何なんだ！？」

「……残念だったな、もう遅ぇ……」

現場の周囲を封鎖していたバリケードを突破して、三台の真っ黒な大型ＲＶ車がこちらに向かって猛スピードで突っ込んで来る。それらは機動隊の隊列の目の前でドリフトしながら急停車すると、車内から数人の黒服隊員達が飛び出して被害者の少女と一緒に数人の柄の悪い若者連中を一つの縄に縛って連行してきた。

「婦女暴力未遂事件の被害者と真犯人の加害者グループ、マスターＫこと真中啓介の命により今ここに連行して参りました！　自主的な協力により証言した犯人グループの自白もすでに録音済みです、これより保護した被害者と犯人グループの身柄、回収した証拠品を警察機関に受け渡します！」

「この人達、夜道で私の事を襲ったんです！　私、ちゃんと全員の顔を覚えています！　あの家にいる人達は私を助けてくれた恩人です、悪いのはこの人達なんです！」

「……親父～、ごめんよ～、捕まっちったよ、助けてくれ～……」

「……ま、正信！　お前という息子は、いつもいつも私の足を引っ張る親不孝者め……！」

警察の威厳を地に落とす大スキャンダルを目の前した報道陣や野次馬が呆気に取られている最中、今度は空から大きなプロペラ音と共に強烈な疾風が辺りに吹き乱れた。自衛隊の物並みに巨大な黒一色のヘリコプターの登場に、周囲の緊張は一斉にピークに達した。

「虎太郎、啓介や！　啓介が帰ってきたでぇ！！」

「……遅くなった、待たせたな……」

「おっせーんだよ、バカ野郎……！」

ヘリから下に垂れる縄梯子には、見慣れた黒いサングラス姿に首元から膝元まですっぽり隠れる黒いコートを風になびかせている啓介がぶら下がっていた。どうやら例の自家用軍隊がクソ警視監補佐の息子の犯人グループを捕らえる事に成功した様だ。しかし、それにしても必要以上に派手な登場演出だ。どこのアメリカンヒーローだよ！？

「何や、随分と手間取ったみたいやんけ？　啓介ぇ、お前んとこの自慢の黒ネコ忍者部隊、子供連中一つ見つけんのにこない苦労しとる様じゃ大したもんでもないんとちゃうかぁ？」

「……茶化すな新作、重要人の確保と連行は迅速に行われていた、手間を取ったのは整備に時間の要したこのヘリの離陸だけだ……」

「つまりはてめぇの演出待ちかよ！？　ざけんなてめぇ、余計な費用使ってねぇで電車とかバスとかエコ機関使ってさっさときやがれ、このバカ野郎が！！」

「……一度やってみたかったんだ、すまない……」

まぁどうであれ、これで役者は揃った。証人も証拠も全て準備完了。ギャラリーもカメラを構えた報道陣から騒ぎを聞きつけてやってきた爺さん婆さんからお孫さんまで揃い踏み。白い目に晒されているお偉いさんの狼狽振りがちゃんちゃらおかしいぜ。さぁ、揃ったところで始めよう！　野郎ども、祭りの時間だぜ！？

「……こ、これは陰謀だ！　私を失脚させる為に仕組まれた罠だ！　私は知らん、自分の息子が犯罪に手を染めていた事など、私には一切関係無い！！」

「そりゃねーよ親父！？　助けてくれよ、いつもみたいにこの話も上手く揉み消してくれよ～！」

「ふざけるな、この出来損ないの親不孝者め！　私はお前みたいな息子を持った覚えなど無い！　三河、コイツらが事件の真犯人だ、早く逮捕して連行しろ！！」

「馬鹿言ってんじゃないよアンタは！　例え血が繋がっていなくてもな、親になった以上は子供の責任は育てた親自身の責任でもあるんだよ！？　それをアンタは……！　ゲホッ、ゲホッゲホッ……」

「……ババア、もう引っ込んでろよ、後は俺が仕留めてやっから見学してろや……」

「……虎太郎、頼んだよ？　ゲホッゲホッ……」

「いいか良く聞けぇ！！　その覚悟も出来てねぇ半人前の人間が、女はべらかして嫁にガキ産ませて一丁前にお天道さんの真下で偉そ

うにふんぞり返ってんじゃねぇぞゴラァ！！　同じ父親としててめぇはクソったれの最低野郎だ、代わりに俺がてめぇの嫁を擦り切れるまでＦ〇ＣＫしてやるから指くわえて眺めてろやイ〇ポ野郎！！」

「……あたしはそんな下品な文句を教えた覚えはないよ、馬鹿息子め……」

あん？　そうだったっけか？　まぁ、良いだろ。これは俺様オリジナルの喧嘩文句だぜぇ！？　若干周りが引いているのが気になるが、とりあえず兄弟達も俺に続きな！！

「……この様な無責任な愚か者が社会の重要なポストに就いているとは恐ろしい話だ、これでは国の治安の為に命懸けで働く部下達の努力は一つも報われん、立場や組織が違うとはいえ、同じく責任を担う者としては絶対に許せん男だ、反吐が出る……」

「全くやで、聞けば聞くほど呆れるわ、なぁ、イケてないオッサンよ、アンタ多分一度も挫折なんて経験せんでノコノコここまで出世してきた世間知らずの凡才坊ちゃんとちゃうか？　せやから他人の苦労や痛みがわからんで平気で人を陥れたりする事が出来んねやろ？　そないな事じゃ女の子にはモテへんなぁ、きっと仕事場でも部下のお姉ちゃんからお茶に雑巾の絞り汁入れられて鼻つまみ扱いされてんねやろなぁ？　オッサン、キモ～いってな？　ヒャッヒャッヒャッ！」

「……う、うぐぅ、貴様ら、言わせておけば……」

俺達三兄弟揃い踏みの舞台に、さっきまでヘロヘロだったババアもすっかり威勢を取り戻して上機嫌だ。追い詰められた権力バカの白髪頭に向かって、しんどいならやめりゃいいのにでしゃばって、とどめの一撃を食らわせろとばかりに俺達の後ろからハッパをかけてくる。

「よぉし！　お前達、一人前の男として成長したその成果を今ここであたしに見せて貰おうじゃないか！　それぞれ一人ずつ、あの馬鹿タレに向かって人生の教訓ってもんを教えてやんな！！」

「任せときや母ちゃん！　まずはこの俺、全国の女子高生のアイドル松本新作ちゃんから優しく手ほどきレッスンしたるでぇ！？」

いきなり俺がおっ始めちまったらコイツら二人の立場が無くなっちまうからなぁ。まずは一番手。松本新作、お手並み拝見。

「なぁ、おっさん？　突然かもしれんけどな、アンタ、もし人から『明日死ぬよ』って言われたらどないする？」

「……何？　いきなり何の話だ？」

「俺はな、こう見えても十数年も前に医者から『死の宣告』を受けた人間なんやで？　あなたの心臓、もしかしたら明日にでも止まりますよー、ってな？」

そう、新作の心臓は健康な俺達のものとは違う。高校生の時に突然

襲われた難病によってその心臓は普通の人間の半分以下しか機能しなくなってしまい、自分の夢だったプロサッカー選手の道を断念せざる負えなくなったんだ。
それでもコイツは限られた自分の命を悔いなく全うしようと報道ジャーナリストとして世界中を飛び回り様々な事件や戦争の悲痛な現実を訴え続けてきたんだ。つまり、コイツは俺達の中で一番権力により知るべき権利を奪われる事を嫌う命の伝道師、真実の男なんだぜ！？

「ええか、これは俺、松本新作がこの世に生きた証の遺言として受け止めろや！　こうしている今現在も世界中には心無い非人道的な権力を持つ者達の元で人間としての全ての自由を奪われ、最低限の生活すらも出来ずに涙を流す人々がたくさんおるんや！　おっさん、今アンタがしとる事はな、その連中どもがしとる非道な行為と何ら変わらへんのや！　力によって自分の都合の良い様に真実を闇に葬り、個人の人権を無視して人為的に社会から脱落させようとする行為は、人殺しと一緒なんや！　かけがえのない尊い命を奪い取る事と全くもって一緒なんや！！　生きとし生ける者全ての命を蔑ろにして、真実をねじ曲げようとする輩は俺が絶対に許さへん！！　これからの新しい時代を担う子供達の為にも、俺はこの命が燃え尽きても世界中にホンマの真実を訴え続けるでぇ！！」

「……ひ、人殺しとは……！」

人殺し、これはさすがに警察相手には効果てきめんだったな。新作の仕事上での知り合いだろうか、報道陣の人ごみからは拍手が挙がり出して周りの野次馬達も盛り上がり場の空気は完全に俺達のもの。普段はヘラヘラしている新作もその気なりゃこれくらいお茶の子さ

いさい、ハナを飾るには十分過ぎる啖呵切りだっだぜ。さすがは兄弟分、やるじゃねぇか。

「……アカン、久々熱うなったら心臓バクバクしてきた、まるで素敵なお姉さんと恋に落ちたみたいやわ……」

「……例えは良く理解出来ないがその体では無理もない、少し休め新作、後は俺が引き継ぐ……」

俺の左でゼーゼー息切れしている新作を制して、今度は右から啓介が前に出て長身の目線から白髪頭に一瞥下す。真っ暗なサングラスの隙間から見えた瞳の眼光は怒りに満ちた鋭く冷たい輝き。ほぉ、珍しい。コイツが感情を外に出すとはな。二番手。真中啓介、お手並み拝見。

「……お、お前は私も知っているぞ、ミュージシャンの真中啓介だな？　華やかな芸能界で成功を収めた人間が、なぜわざわざ自らの損害を省みずに一般人の私情などに関与する！？」

「……世論の声に耳を傾け、間違いだらけの世の中にその業を持って真実を問いかける、それはどの時代においてもアーティストを名乗る者が背負う一つの使命だ、金や名誉だけを求め小さくまとまったＲｏｃｋ'ｎ'Ｒｏｌｌｅｒの錆びた歌声になど、誰の胸にも響きはしない……」

「……な、何とキザな台詞……！」

「……貴様には、人の上に立つ、という本当の意味と重圧を理解出来ているのか？　自分を下で支えてくれている人間達の生活、人生、そしてその命を保証する責任者のしての自覚、貴様にはそれが備わっているのか……？」

啓介は国民的人気バンドのギタリストから様々な経緯を辿り中には悲痛な苦悩を経験して、一代で世界の五本の指に入る巨大音楽レーベルを作り上げる事に成功した。しかし、創設者で社長という最高幹部である事は、つまりは自社の部下達の生活の保証と全責任を負わなければならないという事。莫大な富を得たと同時に、決して放棄出来ない重たい十字架を背負う事になった訳だ。
自分の行動一つで会社の経営が傾き、何百人という人間が人生の路頭に迷う可能性がある。だからこそ、啓介は人の上に立つという重大な役割の責任を身に染みて体感している。だからこそ、愛すべき大切な人々に対しては金に見切りをつけずに手厚い保護の手を差し伸べる。私欲に溺れ他を蹴落とす卑劣な亡者は絶対に許さない、王道を歩み続ける至高の男なんだぜ？

「……愛する子息の為に起こした行動であるのは、同じく自分の命よりも大切な妻と娘を持つ一家の主、そして父親として同情する、しかし、それにより自分の配下に属し命を預ける者達を危険な目に巻き込むなどという悪行は言語道断！　それが卑猥な過ちを隠し通す為に行ったのならば尚更！　貴様の様な愚かな堕落者にリーダーを名乗り、人の上に立つ資格など一切もって無い！！」

「……だ、堕落者……」

「……これこそが王道、この魂の叫びこそが男のＨａｒｄ　Ｒｏｃ

kだ、Ｉ　Ｌｏｖｅ　Ｒｏｃｋ'ｎ'Ｒｏｌｌ……！」

そうそう滅多に見せない啓介の気迫と怒涛の一喝。ただでさえ身長が１８６センチもあってツンツン頭にサングラスに黒尽くめの衣装だからな、見かけ倒しのヤンキーぐらいなら目の前に立たれただけでも腰が抜けて小便チビっちまうぜ？　ギター無しでもイカしたＳｐｉｒｉｔｓ　Ｓｏｕｎｄを聴かせてくれるぜコイツは。さすがは俺様の右腕だな。

「おーおー、熱っいのぉ啓介？　普段Ｃｏｏｌな啓介がこないにＨｏｔになるのはいつ振りやろか？　宮沢りえのサンタフェ以来の衝撃や、軽く後光が差しとる、有り難や有り難や、ナンマイダブ、ナンマイダブ……」

「……俺とした事が、また下らん事で火が点いてしまった……」

新作、啓介と続けてこうも見せつけられちまったら俺が黙っている訳にはいかねぇだろう。白髪のおっさん、この時すでにノックアウト寸前でこれ以上イジメたら泣き出しちゃいそうだったけど、オイタしちまったんだ、きっちりと最後までお灸を据えてやらねぇとなぁ？

「サァサァサァ、お膳立ては済んだで虎太郎！　スカッと気持ち良いヤツを一発頼むでぇ！？」

「……久々の独自の不可解理論、期待しているぞ……」

「やっちまいな虎太郎！　冥土の土産に、このあたしにお前の生き様を腑抜けども達に叩き込んでやるところを見せておくれ！！」

啓介も新作も、ババアも周りの観客どもも俺の啖呵が聞きたくてウズウズしてるみてぇだったからな、一丁濃ゆぅいヤツをガツンとお見舞いしてやったのさ。聞きてぇか？　そんなに聞きてぇか！？　なら耳の穴良くかっ堀っじって……！　いやいや、文章だから目ん玉引ん剥いて一文字残らず声を出して読みやがれクソったれどもがぁ！！

「オイ、おっさん、おめぇさんよ？　いちいち甘ぇんだよ、甘ぇ、バニラあんこチョコバナナミルククリーム抹茶白玉杏仁豆腐パフェに練乳と蜂蜜かけて角砂糖丸ごと十個入れたくらい甘ぇよスイーツ野郎」

「……な、何？　何だって？」

「悪に手を染めるんならな、徹底的に真っ黒になるまで染まりやがれやダニ野郎！！　強行突入すんのにわざわざ時間の猶予なんぞ持たせやがって、人に喧嘩を売るんだったらな、生きるか死ぬかの覚悟で、俺達全員を射殺するぐらいの覚悟でかかって来んかいゴラァ！！」

「……ハ、ハァ？」

さっきまでの啓介や新作のとはまるで色彩の違う俺のハチャメチャ

な言い分に、白髪頭を始め周りの人間達は鳩がマメ食ってポッー！
みてぇな顔して唖然としてやがる。間抜けなひでぇ面だぜ、オイ。

「……なぁ、祖母ちゃん？　本当にこの人に残り全部を任しちまって大丈夫なのかー？　あたし達には言ってる事がさっぱりわかんねーよ？」

「大丈夫だ！　育てたあたしが言うのも何だが、この男は普通じゃねぇ、タダもんじゃねぇ！　馬鹿さ、最高の馬鹿さ！　祖母ちゃんが波子達に教える最後の生き字引だと思って、黙ってコイツがのたまう最高の啖呵を一言も聞き漏らさずにその心に焼き付けな！」

そうさ、俺は普通じゃねぇ。普通じゃねぇから最強なんだ。オンリーワンだからナンバーワンなんだ！　俺が言いてぇのは人権やら責任やら正義やらと言った難しくて堅っ苦しい話なんかじゃねぇ。警察や社長や命や、ましてや婦女暴行未遂やガキの冤罪なんて話もどうだっていいんだよ！

「悪事働いて人様に喧嘩売ったからにはなぁ、中途半端な良心の呵責なんかに縛られて良い子ぶってんじゃねぇぞゴラァ！！　何が正義だ！　何が鉄裁だ！　悪魔に心を売り払って俺様に盾突くならな、俺様と同じぐらいに身も心も真っ黒に染まり尽くしてから舞台に立てや！！　てめぇなんぞじゃ力不足だ、俺はてめぇみてぇな身の程知らずのクソったれがな、ズケズケと土足で俺様の舞台にのし上がってきたのが一番堪らなく許せねぇんだよぉ！！！！」

「えぇっ！？　そんな無茶苦茶な……！」

俺の怒りはそんじょそこらの野郎どもとは違う、核ミサイル東京ドーム十杯分の超危険物取扱いモノだぜぇ？　俺がこれまで対峙してきた人間達はな、何一つ手段を選ばねぇ生粋の極悪人どもばかりだったんだぜ？　この程度のおふざけなんぞ所詮は赤ん坊の悪戯程度、そんなガキの使いに付き合わされるのはオカト違いなんだぜクソ野郎！！

「いいか、良く聞けチンカス野郎ども！　この世に『正義』なんてもんはどこにも存在しねぇ！　そんなもんが存在してたらな、全ての人間が掲げる思想がその当人達にとっては正義になって、あっちもこっちもどいつもこいつも正義まみれになっちまうだろうが！？
　片方にとっては正義でも、もう片方がそれによって苦しんだりしたら、それは正義でも何でもねぇんだよ！　だから、この世に正しい道義なんてもんを統一して定めちまったら、それに当てはまらない人間達だけが大損しちまうだろぉ！？」

「……何を言っているのか良くわからんが、だとしたら私は己の正義を貫き、自分の愛する息子を助けようとしたまでだ！　それの何が悪い！　私は何も悪い事はしていないぞ！！」

「悪ぃんだよ！　てめぇがした事はクソったれの包茎チ〇ポのチンカス野郎なんだよ！！」

「……えっ？　はっ？　はい？」

おーおー、見渡す限りの人間全員が訳わかんなくなって頭傾げて『

？』のマークが頭上にプカプカ浮いてやがる。オモチャに釣られて並んでキョロキョロする子猫の集まりみてぇだな。滑稽な場面だぜ。

「いいか、良く聞け、正だろうが悪だろうがそんな事はどっちだっていいんだよ、俺が言いてぇのはてめぇ中途半端な腰抜け野郎で、俺はそれが何しろ気に食わねぇんだよ！　まぁだわかんねぇのかクソ野郎！！」

「……だ、だから何なんだ貴様は！？　さっきから言ってる事が支離滅裂でさっぱり理解出来ん！　一体何が言いたいんだ！？　もう少しわかる様に説明しろ！」

さぁ聞け、俺の本当の舞台はこっからだ。呼んでるてめぇら全員のこれまでの人生で学び蓄えてきた常識を全部否定して木っ端微塵に打ち砕いてやるぜ、覚悟がいいかゴラァ！！

「俺が言いてぇのはな、自分自身の心にちゃんとてめぇで問い掛けさえすれば、その道が正の道だろうと悪の道だろうと自ずと人前に晒しても恥ずかしくない全うな人生を送れんだよ！　己自身の心に潜むちっぽけな自分の弱さから逃げずに呆れるぐらい向き合っていけば、賢者だろうと悪党だろうとお天道様に見られても恥ずかしくない正しい人生を歩んでいけるんだよぉ！！　てめぇはどうだ！？　半分は悪魔に心売り払って犯罪者の片棒担ぎながら、もう半分は天下の警視監補佐で正義だとぉ！？　どっちつかずで両方の甘い蜜吸おうとする半端な卑怯者はな、俺は堪らなく許せねぇんだよぉ！！！！」

「……！」

「俺様の人生の理論はなぁ、誰一人涙に暮れる事無く世界中の人間が１００％一人残らず笑顔で幸せな人生を全うする事だぁ！！　無理も道義も関係ねぇ！！　人を幸せにするのに善も悪も白も黒も神も悪魔も関係ねぇ！！　不可能だろうが理不尽だろうがちっとも関係ねぇ！！　それが俺様、渡瀬虎太郎の生きる道なんだよ、わかったかゴラァ！！！！」

「ガーーーーン！！！！！」

「中途半端な真似すんだったら最初っからつまらねぇ事すんじゃねぇ！！　てめぇは白なのか黒なのか、はっきり色つけろやクソったれ野郎がぁ！！！！！」

何だ？　俺の啖呵に拍手が起こるどころかすっかり静まり返っちまったぜ。込み上げてくるアドレナリンでビリビリ痺れてんのは両隣の兄弟達と後ろのババア達だけみてぇだな。

「キタキタキタでー！！　相変わらず言っている事は良くわからんが、何だかスゴい自信や！！　よっ、理不尽大魔王！　この最低男！　クズ！　人間のクズ！」

「……何という理不尽で自分勝手な理論だ、しかし、いつ聞いても心地が良い……」

「……祖母ちゃん、何か全然訳わかんねーけど、この人すげーよ！　漢だ、これこそがあたしが求めてる理想の漢像だー！！」

辺り一面夜中みてぇにすっかり静まり返って海の潮騒が聞こえてくるぜ。どうだ、俺の啖呵はパトカーのサイレンすらグゥの字が出ねぇほどまで黙らせる極上物だぜ！　さぁ仕上げだ、最高級フルコースのメインディッシュを心ゆくまで堪能しな！？

「その理想を邪魔するドドメ色の中途半端なクソどもはな、極悪非道を地で行くこの俺様が分別つかなくなるぐらいまで一面真っ黒に染め上げてやるから心配すんな！！　どんな展開も、どんな逆境も、どんな運命もどんな宿命もこの俺様を縛りつける事は出来ねぇぞ！！　地球上を愛と平和に溢れた暗黒世界に染め上げるまで、俺様の暴挙は止まらねぇ！！　俺を潰してぇなら冷酷非情を貫きひとマス残らず真っ白に埋め尽くせ！　ただし、ひとマスでも残せば、俺はルール無用で黒石一つをもって局面全てを真っ黒にひっくり返してやるから覚悟しろやぁ！！！！！」

「……な、何という理不尽暴虐で天変地異な神をも恐れぬその言動！　そんな馬鹿な、こんな事が、こんな勝手な言い分がこの世の中にまかり通って許されるのかぁ！？」

ところが許されるんだよ、この渡瀬虎太郎様ならな！　俺様は規格外、太陽系は俺を中心に回ってんだよ！　見てみろ、さっきまで黙り込んでいた周りを取り囲む野次馬達のスタンディングオベーションをよ！？　町民や報道陣どころか、機動隊の兄ちゃん達まで感動して大拍手の嵐だぜ！！　これなら総理大臣どころかアメリカ大統領も楽勝で当選だな！？　まぁ、政治なんて臭ぇもんにはこれっぽっちも興味なんぞ無ぇけどな。

「……わ、私の持つ警視監補佐の権力を甘く見るなよ、いざとなればや各メディアに報道規制をかけて、貴様達に邪魔されずに事実をねじ曲げる事くらい……！」

「とことん後腐れの悪い野郎だなぁ？　あぁ、そうかい、それなら、てめぇの最後の切り札のメディア連中にはここいらで退場して貰おうかねぇ？　オイ、兄弟ども！　宴だ、羽目外すぜぇ！？」

「うわーい！　高校生の時以来の無礼講や～！　自分解放～！」

「……度重なる仕事の毎日であの頃の自分を見失っていた、久し振りに心の洗濯でもするか……」

「な、何をする気だ！？　やめろ、公然の前でなぜ尻など出す！？　報道局のカメラも生中継をしているんだぞ、やめろぉー！！」

「行くぜぇー！　ルールもマナーもモラルも木っ端微塵に吹き飛ばす俺達の必殺技、『固定概念ぶっ壊し～！』」

丘の上に横一列に並び背中を向けた俺達は、一斉にズボンとパンツを膝まで下ろしてカメラに向かって汚ぇケツの穴までご開帳～！
報道機関がなんぼのもんじゃい、全国放送で映せるもんなら映してみやがれクソったれがぁ！！

「……Ｉｔ' ｓ，　Ｓｈｏｗ　Ｔｉｍｅ……！」

「ほな行くでぇ！？　あ、ワン、ツー、ワンツースリーフォー！！」

「ケツケツケツケツケツ～、ケツケツケツケツ～♪」

とくと見やがれ、これが森川の里名物の三バカトリオのケツケツダンスだぜ！　どうだい、キュートで今にもしゃぶりつきたくなる様なイカしたヒップだろぉ？　今日はオマケにケツ毛からギャランドゥまで茂るまっくろくろすけと本編で活躍する娘達の故郷であるゴールデンボールと暴れん棒将軍まで包み隠さずサービスカットしてやるぜぇ！？

「うわぁ！　何て下品で卑猥な光景だ！　こんな物を全国放送したら視聴者から苦情が来て、ＪＡＲＯから何を言われるかわからんＪＡＲＯ～！？」

「カメラを全部止めろー！　中継は中止だ中止！　報道陣は直ちに全員現場から避難しろぉー！！」

ウヒャヒャヒャヒャヒャ、蜘蛛の子を散らす様に報道陣のカメラマンやアナウンサー達が報道車両に乗って逃げていきやがった。これで規制やらで間違った情報操作がされる心配は無くなったな、完璧だぜ！

「お母さーん！　あたし生まれて初めて父ちゃん以外の男の人のウツボを三匹も見せられたよー！　怖えーよ、プルプルしてて気味悪りーよー！　もう恥ずかしくてとても目ぇなんて開けてらんねーよ

ー！！」

「何だぁ娘っ子？　おめぇまだ神様が作ったこの漢の芸術品を見た事がねぇのかよ？　じゃあ、近い将来のこの武雄とかいうガキとのニャンニャンの為に良ーく観察して勉強しとけ？　ほーれ、ほれほれ」

「やめなさい虎太郎！　波子はまだ高校生なのよ！？　可憐で純粋な娘をその汚い祖チンで汚すんじゃないわよ！！」

「……三人とも、俺なんかと比べ物にならねーくらいすげー大物だなー？　大人ってすげーな、俺、これじゃいつか自分のを波子に見せんのが情けなくて恥ずかしくなっちまうよー……」

まぁ、まだガキのポークビッツじゃ俺達のメガフランクにはまだまだ及ばねぇさ。とりあえずミミズにでも小便かけてみたらどうだ？

歩美姉とその娘を自慢のうまい棒でからかいながらふと後ろを振り向くと、あの白髪頭はガックリと地面に膝を突いて手をプルプル震わせていやがった。周りを取り囲む機動隊や警官達もすっかりやる気を無くして総スカン。いい気味だぜ、全く。

「……こ、これは、国家権力に対する挑戦だ！　無差別テロだ！　クーデターだ！！　こんな真似が許されて良いはずが無い、こんな事では警察の威厳は地の底に……！」

「……警察の威厳？　はて、果たしてそれを地の底まで落としたのは一体誰の仕業でしょうな？」

「……何だと？　何者だ貴様は！？」

「お～い虎太郎、どうやらお前と仲良しのお友達がやって来たみたいやで～？」

「……チッ、何だよ、あともう少しこの白髪頭をイジメてやろうと思ったのによ……」

聞き覚えのあり過ぎる図太く低いその声がしたその方に目をやると、ヨレヨレのトレンチコートを羽織ったモジャモジャ頭の見慣れた小汚いおっさんがこちらに向かって歩み寄ってきていた。望んでもいねぇ余計な来客。誰だ、このおっさんこんな所まで呼び寄せたヤツは！？

「申し遅れました警視監補佐殿、私、神奈川県警の鬼頭と申す者です、警視庁直々の出動命令を受け現地に到着致しました」

「鬼頭？　神奈川県警？　他県の、しかも所轄の刑事がわざわざここに何の用だ！？」

「こちらに、県内の重要危険人物が尻を晒して暴れていると報告がありましてな、その人物と一番付き合いの長い私が身柄引受人として任命された次第で……」

鬼頭。忘れもしねぇ名前。このおっさんは俺がまだガキの頃にあちこちで悪さしまくってた時から執拗に追い回してくる俺の大ファン、いや、悪質ストーカーの一人だ。俺が行く所、必ず先読みして手ぐ

すね引いて陣取ってやがるんだよな。
高校時代に横浜に遊びに行って現地の不良達と喧嘩して初めて警察の厄介になった時もそう、ここの孤児院を出てバイクショップで働きながら夜な夜な爆走しまくってた時もそう、必ずこのおっさんが目の前に現れて問答無用でこの俺様をしょっぴきやがる。
だからよ、俺にとってこのおっさんには随分と煮え湯を飲まされた苦い思い出ばかりなんだよなぁ。俺どころか、最近まで非行に走っていた優歌もこのおっさんには相当苦労させられたらしいな。顔を見るだけでもジンマシンが出るんだってよ。定年間近なんだからおとなしくしてりゃいいのになぁ？

「……おや？　こちらにいる少女と柄の悪い青年達は一体今回の件とどの様な関係があるのですかな？　何やら少女は非常に怯えているようにも見えますが……、もしもし君、何かあったのかい？」

あざといなぁ、おっさん。最初から事の詳細を全て知っていてわざと一芝居うってやがる。クドいおっさんだけどな、とりあえずは俺が警察の中で唯一信頼出来て話の通じる貴重な存在なんだ。優歌の例の一件の時も色々と世話になったしなぁ。

「刑事さん！　私、この人達に襲われそうになったんです！　それをあの家にいる人達が私を助けてくれたんです！　それなのに、この警察の偉い人は嘘をついて話を誤魔化そうとしたんです！　お願いです、どうか本当の犯人を捕まえて下さい！」

「何ですと、それは聞き捨てならぬ一大事だ！　そこの青年達、詳しい事情を聞きたいので署まで同行して貰おうか！？」

「親父、助けて〜！？」

「待て！　それは、それは私の息子……！」

「……何ですと？」

「……いや、だから、この事件はつまり……」

「……そう言えば、先程警察無線にも何やら聞き捨てならぬ言葉のやり取りが流れていましたなぁ？　冤罪がどうとか、私は悪くない、とか」

「……なっ！？」

ピーンときた俺が横を振り向くと、新作が声を殺して静かに爆笑してやがった。コイツ、警察無線にまで細工を施して全国の無線に音声実況生中継を展開してやがったんだな？　いつやった？　俺が桐箪笥ブン投げて場が混乱してたどさくさに紛れて盗聴器仕掛けやがったな！？

「田巻警視監補佐、事件の捏造と無実の人間への冤罪、そして証拠の隠蔽と、この数々の悪意に満ちた行為は例え管理職の立場とはいえども許される事ではありませんぞ！　早急に責任を取り、自ら職を辞する事をお勧め致します！」

「……認めん、私は認めん！　これは陰謀なんだ！　私は何も悪くない！！　いや、悪い？　いや、悪くない！　えっ、どっちだ？

私は善と悪、どっちにつけば良いんだ！？」

「見苦しい！　あなたも一端の男であるならば、潔くここで腹を斬りなさい！！」

「おーい、みんなー！　ハラキリショーが始まるよー！　さぁ、みんなでレッツダーンス！！　ケツケツケツケツケツケツ～、ケツケツケツケツ～♪」

「ぎゃあー！　やめろ、もうやめてくれー！！」

「さぁ、潔くケツ断なさい田巻正夫！　このままでは、この事件は『伊豆半島婦女暴行未遂お下劣ケツケツダンス事件』として世の末代までの笑われ者になりますぞ！？」

「……申し上げます！　警視監補佐、警視庁総監より大至急こちらへ出頭するようにとの連絡、この一件の詳細を報告せよ、と……！」

「どうやら先に、制限時間が来てしまった様ですな？」

「……早急に出頭すると警視庁に伝えてくれ……」

まるで全身脱臼したみたいにガックリと肩を落とした白髪頭のクソったれは、親不孝なバカ息子達と一緒にパトカーに乗ってどこかに連行されていった。この先、あの男に待っているのは蟻地獄の様な最悪の現実だろうなぁ？　中途半端に悪に手を出した輩にはお似合いの末路だ。ざまぁカンカンだぜ。

「……この部隊の隊長は誰かね？」

「……ハッ！　私、三河晃であります！　所属は静岡県警機動隊、階級は……！」

「いやいや、堅苦しい挨拶はやめてくれ、後の事は警視庁より直々に使命を受けた私が一任するから、君達は早急に近辺の交通規制を解除して撤収してくれたまえ、ご苦労だった」

「……鬼頭刑事、あなたは一体……？」

「……君は、良い目をしている、きっとこれからの警察を担う人材になるだろう、地に落ちた県警の信頼を取り戻す為に、これからも頑張ってくれたまえ」

「……ハッ！　ありがとうございます！　全隊員に告ぐ、撤収の準備をせよ！　撤収ー！！」

そして、現場には警官が一人残らずいなくなっちまった。日頃の警察に対して溜まった鬱憤を思いっ切りぶちまけてやろうと思ったのによ、当たる相手がいなきゃどうにもなりゃしねぇってもんだぜ、全く。

「あんた達、警察相手にこんなに立ち振る舞うだなんてすげーな！？　俺達は見ててすっかり関心しちまったぜ！」

「武雄の事を助けてくれたんだってな！？　あんた達はこの港町のヒーローだ！　さすがは鈴子婆さんの所の出身だぜ！　恩に着るぜ、

旦那！！」

まぁ、周りの野次馬達がチヤホヤともてはやしてくれたもんだから、俺もあまり悪い気はしなかったけどな？　こんなに大勢の人に囲まれたのは現役ライダー時代の表彰台とガキの頃に機動隊百人に取り囲まれてひと暴れした時以来だったかなぁ？

「よっしゃ、そんじゃ周りの皆さんもケツを晒け出して一緒にケツケツダンスしようぜぇ！？　女も若い姉ちゃんは大歓迎、年増のババアは引っ込んでな！　あ、そーれ、ケツケツ……」

「……渡瀬……」

「おう、鬼頭のおっさん！　わざわざ半島の端っこまで出張ご苦労さーん？　どうだい、おっさんもケツケツ……」

「……尻をしまえ……」

「あぁ？　何だって！？」

「大至急その汚い尻をしまい込め！　お前達はいつまで下品なイチモツを公然の前で晒し続けるつもりだ！？　早急にしまえ、これは公務命令だ！！」

「堅ぇ事言うなよ、たまには外に晒して風にブーラブラ揺らしてみるのも気持ちの良いもんだぜぇ？　ほら、おっさんも自分を解放してみろよ？　ブーラブラ、ブーラブラってな？」

「公然わいせつ行為で刑務所暮らしがしたいのか貴様は！？　四十を越えて妻子までいる身分のクセに、恥ずかしいとは思わんのか！？　早急にしまえ！　大至急だ！！」

鬼頭のおっさんに警棒で尻をシバかれた俺達は渋々ズボンを上げて自慢のイチモツとキュートなヒップを封印した。ガキの頃に戻ったみたいで楽しかったんだけどなぁ？　新作どころかキャラに無い啓介まで尻をプリプリとノリノリだったのによ。

「オイ、ババア！　とりあえず一件落着したぞ！　これがお望みだったんだろう、満足したか、あぁん！？」

「……」

「……ババア？」

「……返事が無い……」

「……オイオイ、母ちゃん！？　どないしたん！？」

「嘘でしょ？　ねぇ、母さん！？　母さんってば！？」

「イヤだよ祖母ちゃん、返事してくれー、祖母ちゃん！？」

階段に腰を下ろして俯いたまま、ババアは目を閉じて返事をしなかった。焦ったよ、まさかこの一件で燃え尽きちまったんじゃねぇかってな。俺達の成長した姿を見て満足してあの世に旅立っちまった

んじゃねぇかってな……。

「オイ、ババア！　俺との勝負はまだ決着してねぇぞ！？　てめぇ、このまま俺から勝ち逃げするつもりなのか！？　そんな真似は絶対に許さねぇぞ、俺は一度でいいからてめぇをギャフンと言わせねぇと気が済まねぇんだ！！　起きろよ！　目を開けろよクソババア！！！！」

「うるさいねぇ！！　そんな大声出さんでも聞こえてるよ馬鹿息子がぁ！！！！！」

「う、うわぁ！？　生き返った！　ゾンビだぜゾンビ！　噛まれたらTウイルスが伝染するぞ、誰かこのババアの頭を拳銃で撃ち抜いてくれぇ！？」

「誰がゾンビだい、この無礼者が！？　言っただろうが、歳を取ると人間は自然に眠くなってくるんだよ！！　人が気持ち良くうたた寝してるのを馬鹿デカい大声で叩き起こしやがって、ふさげんじゃないよ、全く！！」

全く、はこっちのセリフだバカ野郎！！　本当に全く、最後の最後まで人騒がせなクソったれだなこのババアはよ！？　安らかな顔してるからてっきり御陀仏さんかと思いきや、ゴキブリみたいにしぶとい死に損ないだぜ？　本気で心配しちまったじゃねぇか、バッカ野郎……！

「あ～あ、こうも出来の悪い子供達をたくさん持つと、体が幾つあ

っても足りやしないねぇ？　あたしゃ少し疲れたよ、歩美、あたしはもう寝させて貰うから後片付けを頼んだよ？」

「あ、はい、母さん、どうぞゆっくり休んで下さい……」

ババアはそう一言だけ言い残すと、俺達の方を振り向く事無く家の中へと入っていっちまった。この後、俺はババアと一度も会う事は無かった。俺が最後に見たババアの後ろ姿は背中が曲がって昔よりも遥かに小さくなって、それでいて越えられない壁みてぇに大きく見えた。世界中どこを回ってみても、こんなとんでもねぇ無茶苦茶な婆さんには二度と出会える事はねぇだろうなぁ……。

「おっ、おーいみんな、見てみろや！　デッカい綺麗な夕日が海に沈むでぇ！？」

新作の指差す方向に振り向くと、確かに綺麗な夕日が海の水面に映って絶景が広がっていた。朝方はどんよりと空一面曇っていたのによ、すっかりと良い天気になっちまった。昔、良く夕方遅くまでみんなと一緒に遊び回っていた頃にこんな夕日を見たっけなぁ。何か懐かしい光景だったぜ。

「……以前、本で読んだある詩人の一文をふと思い出した……」

「今日はまた良う喋るなぁ啓介？　どないしたん？　雹でも降り出すんとちゃうか？」

「ちょっと気になるな、せっかくだから教えて貰おうじゃねぇか、あぁん？」

「……人の人生とは一日の天候と同じ、どんなに雲に覆われ雨が降ろうとも、最後に夕暮れを見る事が出来れば最高である、とな……」

「……ええ詩やなぁ、終わり良ければ全て良し、みたいな事かいな？　俺もそないな人生を送りたいもんやわ……」

「晴天を誉めるなら夕暮れを待て、か、悪くねぇじゃんか、気に入ったぜ……」

この後、後日にそれぞれ仕事を抱えている俺達は故郷に別れを告げて各自解散した。つーか、新作のネットハッキングと警察無線の盗聴、啓介の黒服部隊による公務執行妨害を鬼頭のおっさんに指摘されてゆっくりなんてしてられなかったんだよな。
新作はウイルスをサイトごと自爆させて証拠隠滅して姿を消しちまうし、啓介はヘリを呼び出してさっさと国外逃亡しやがった。そして一人取り残されたのはこの俺様。見事おっさんにロックオンされてこの一件の主犯としてお縄を頂戴されちまった。
そのままおっさんに神奈川県警まで連行されてよ、とりあえずの見せ締めとして次の日の朝まで年甲斐もなく拘置所にブチ込まれちまったんだぜ？　アイツら簡単に裏切りやがって、何が兄弟分だ！
飯はマズいし、便所は臭ぇし、冗談じゃねぇぜ全くよ！？

「……おぉっと、話に夢中になってたらすっかり日も暮れちまった様だな、今日の夕暮れも綺麗じゃねぇか……」

まぁ、俺とあのクソババアとの思い出話はこれで以上だ。俺は今、飛行機の小さな外窓から海に沈もうとしているデッカい夕日を眺めてあの時の最後の会話を思い出していた。

「……晴天を誉めるなら……」

きっと、ババアの一生は決して晴天続きではなく、曇りの日も、あるいは泣きたくなるほどの土砂降りの日もあっただろう。それでも、人生最後の日にはあの日や今日みたいな綺麗な夕暮れが空一面を真っ赤に照らしてババアを包み込んでいたはずだ。誰が見ても最高の夕暮れ、最高の一生だったと誉めてくれるだろう。例え誉めてくれる人間がいなかったとしても、少なからず俺はババアを心底から誉めてやる。アンタは最高の義母親（おふくろ）で、俺はその馬鹿息子で幸せだった、ありがとうよクソったれ、ってな……。

「……お客様、申し訳ありませんがお荷物の中身について何件かご質問が……」

「……何だぁ？　人がしんみりと思い出に浸ってんのに横槍入れてきやがってよ？　きっちり〆たんだから空気読んでスパッと幕引きさせろよ？　第一、スチュワーデスの姉ちゃんごときがこの俺様に何の用だ？　サインか？　それともニャンニャンしてぇのか？　あぁん？」

「お荷物の中に、何やら鶏肉と思しき土産品がありましたが、それはどこで入手なさいましたか？」

「おーおーおー、あの鶏な？　いやぁよぉ、屋台村に行った時に泡盛飲み交わしながら意気投合した気前の良い兄ちゃんがよぉ、あの鶏を焼いてご馳走してくれたどころか丸々一羽お土産としてプレゼントしてくれたんだぜ？　『オニーサン、コノトリオイシイヨー、モッテカエッテヨー』ってな？　家に帰ったら早速七輪で焼いて一杯やらかそうかなって……」

「お客様、残念ながらその鶏肉はお持ち帰りさせる訳にはいきません」

「……ハァ？　何で？」

「あの鳥は日本名『ヤンバルクイナ』という沖縄県特有の固有種で、密猟及び外部への密輸は法律により禁止されております、あなたには県内に蔓延る密猟集団の密輸ルート解明と摘発の為に重要参考人として連行させて戴きますのでご了承下さい」

「……あのぉ、お姉さんって、何者？」

「申し遅れました、私、沖縄県警に所属する女性刑事、喜屋武と申します、密輸行為摘発の為に覆面捜査をしております」

「……へ、へェ？」

「当機は只今より重要参考人輸送の為、進路を引き返して那覇空港へと向かいます、どうかご協力下さいませ」

「うっそぉぉぉぉん！？」

オイオイオイ、この飛行機マジでUターンして沖縄に引き返してんじゃねぇかよ！？　固有種とか密輸とか、俺は全然何が何だかわかんねぇよ！？　気前の良い兄ちゃんから美味かったから貰っただけでよ、俺は何にも悪くねぇんだって！？　オイ、ちょっと待て。これってまさかババアの怨念じゃねぇだろうなぁ！？
ふざけんなよババア！　しつこく憑きまとってねぇでさっさと成仏しやがれ！　だから、俺は何も知らねぇっつーの！　全くもって事実無根だ！　沖縄はもうコケッコー！　なんちゃって。あ、ニワトリじゃなくてあの鶏何だっけ？　ナンバラバンバンバンだっけ？
何て言ってる場合じゃねぇ！！　愛する娘達が待つ家に帰らせてくれよ、オーイ！！

ーとりあえず、完ー

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2286f/

晴天を誉めるなら夕暮れを待て

2010年10月10日03時21分発行